

42444

教科書文庫

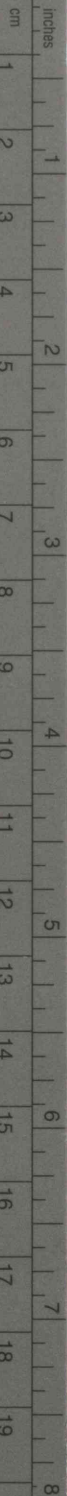
4
810
42-194
200030
1748

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

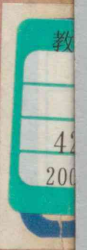
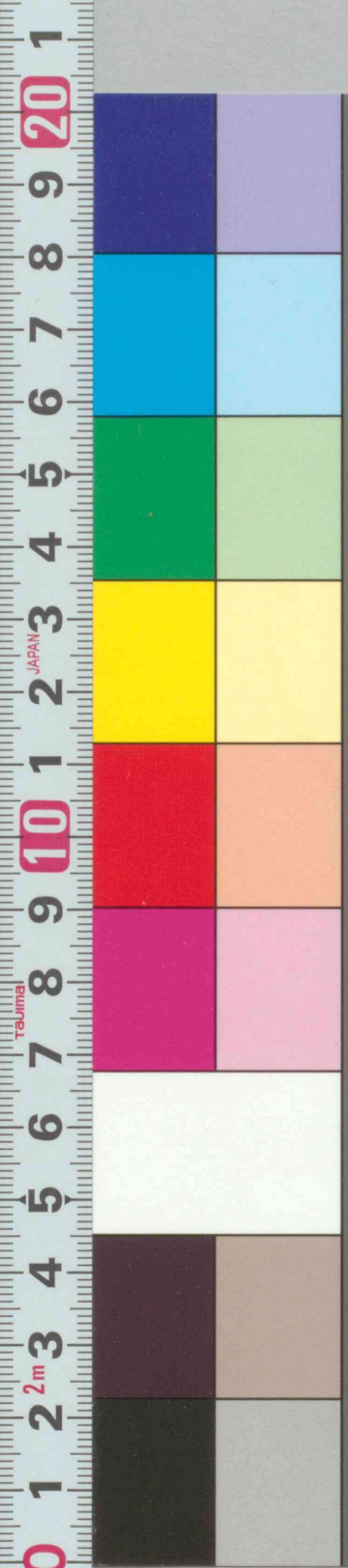
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



訂改
新女子國文
四年制
卷六



教科書文庫
4
810
42-1941
2000301748

濟定檢省部文

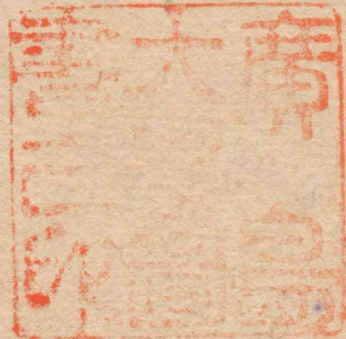
書科教科語國校學女等高 日五十月八年六十和昭

訂改
新
女子
國文

東京帝國大學教授文學博士久松潜一編

資料室

3759
H219





筆風杉山杉

像蕉芭



訂改 新女子國文 四年制 卷六

目次

一	山の文學と水の文學	與謝野晶子	一
二	秋の印象	布村安弘	二
三	水戸のみゆき(昭憲皇太后御集)	阿佛尼	三
四	蓮月尼	上田秋成	三
五	いさよひ		三
六	銀の猫		三

目次

一

六

七 蘆の枯葉
 八 義士の討入
 九 城
 一〇 民族と藝術
 一一 大同石佛寺
 一二 花
 一三 爐の火
 一四 味はひある生活
 一五 佐渡が島
 一六 近江の湖

(西) 源實朝行 四
 榎本其角 五
 長谷川如是閑 五
 柳宗悦 五
 木下杢太郎 六
 岡倉覺三 六
 柳田國男 六
 下田次郎 七
 良寛 七
 (梁塵秘抄) 七

一七 幻住庵の記
 一八 源信僧都の母
 一九 隅田川
 二〇 敵前渡河
 二一 祈から信へ
 二二 小松内府
 二三 人臣の道

松尾芭蕉 一八
 (今昔物語) 一三
 世阿彌 一三
 佐藤春夫 一七
 相馬御風 一四
 (平家物語) 一四
 北島親房 一五



訂改 新女子國文 四年制 卷六

一 山の文學と水の文學

日本文學史の上から見ると上代の文學は山の文學といはれる。大和は一體に水が乏しくまた水が悪い。大和時代の數度の遷都も、水を求めてであるとする考も一應の道理はあるであらう。上代文學が素樸で力強いのも山の文學と見て説明がつく。併し、人間の志向は山から水の方を求める。険しい山より和らかな水の方を憧れるのは自然である。そこで水を求めて終に山城に都を定められた。山城も山に圍ま

山
上古(天和時代)
原始(多奈良)
朝迄

山城
京都

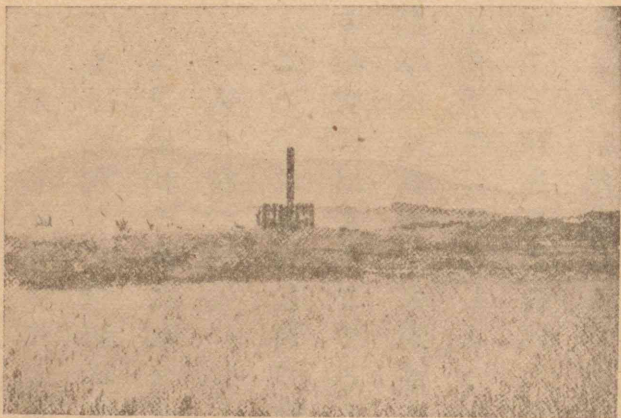
水

中古(平安時代)
平安遷都
政治開始

中世(鎌倉)
室町時代
武家政治の
江戸幕府
府創設迄

れてゐる。併し、こゝには賀茂川の美しい水がある。水が加はると山も美しくなる。中古文學が和らかく優美であるのも水の要素が多くなつたためである。平安時代の自然は水が常に多くの働をなしてゐる。寢殿造の庭園も池が點心の美をなして居り、遣水のかすかな音は女房の心を慰めるものであつた。中古文學は賀茂川から淀川の方へ進まうとした。併し、平安末期からの世の悲しさ、寂しさが再び水から山の方へ方向を變へさせた。山は孤獨な心をもつ。世の悲しさから世をのがれようとする時、それは水から山へと隠れる。山隠りは次の中世文學の主な流をなすものである。隠者文學はこれである。

隠者の生活にも種々ある。眞に現實を厭ふ所から、現實生



平京城址と大和の山々

活を離れて孤獨の生活へ入らうとする場合と、現實に對する理想や欲望のとげられない所から、現實生活から離れて隠者生活へ入らうとする場合とがある。併し現實を厭ふものも、現實を眞に厭ふといふより、現實の愛が根柢となつて、その愛の實現せられざる所から、世を厭ふに至るのである。そこに中世の隠者は消極的ではあるが、現實に對する愛と、それを否定しようとする心との間の相剋が行はれるのである。山林の生活の間から現世を

方丈記

一卷

鎌倉初期に成つた隨筆
作者鴨長明

日野山

京都府宇治郡

西行

俗名は佐藤義清

歌僧

一八五〇年寂

兼好

姓は卜部・吉田

歌人

隨筆家

二〇一〇年歿

徒然草

二卷

吉野時代に成つた隨筆

時々のぞんで居るのである。方丈記を見る時、日野山の奥から人戀ふる心が常に見られるではないか。西行が山に入つても、また現實の世界に歸つてくるのもそれである。

吉野山やがて出てじと思ふ身を花ちりなばと
人や待つらん

この心は西行に於ては常住の心であつたのである。山より現實に出ようとする心がある。これに比すると兼好の徒然草には、世の中に對する執著から離れようとする心がある。山の境地に安住しようとするものがある。それは兼好法師家集と徒然草との間にも、その推移が見られるのである。もとより徒然草にも、この世の愛と、歡樂とを憧れる心と、それを否定しようとする心とがある。それを或説では矛盾といひ、

或説ではより高き精神に於て統一されてあるといふ。自分
はむしろ後者をとるものであるが、その心境こそは隱者の心
といふべきである。この隱者の心こそ中世文學を支配する
ものである。

山の文學はかくの如き孤高の精神を基調とする。中世文
學の基調はこゝにあつたのである。さうして中世から近世
に至る時に山の文學から水の文學への推移が見られる。近
世文學の中心は第一に川を下つて大阪にその現れを見た。
大阪に文學の花の開いたのは元祿時代であるけれども、すて
に豊臣秀吉が大阪城を築いてこゝに移つた時に、山から水へ
の移動が見られたのである。秀吉の闊達なる性格は桃山藝
術を生み出した。それを日本に於ける文藝復興の現れと見

近世(江戸時代)

桃山藝術

豊臣秀吉時代に勃興した藝術

近松

近松門左衛門
本名は相盛信

盛

淨瑠璃作者

一三八四年歿

西鶴

井原西鶴

俳人 小説家

二三五三年歿

るのも至當な見方であらう。元祿文學は桃山藝術のそれに
接續する。近松や西鶴の文學を中世文學と比して異なる點
は多いが、その明るい朗かさ^{カク}に於て大きな相違がある。山林
から水邊へ出て來た文學である。これは芭蕉の俳諧に於て
も同じ精神が見られる。芭蕉の俳諧の中心である「さび」が、中
世の幽玄の發展であることは明らかであるが、「さび」の文學を
幽玄の文學と比すると、どこかに明るさがある。それは山か
ら水への相違ではないか。芭蕉は旅に一生を過したやうで
あるが、「さび」の俳諧を建立した後には、江戸が中心となつてゐ
たといつてもよい。さうして芭蕉の句を見ても、閑かさや岩
にしみ入る蟬の聲といふやうな句もあるけれども、荒海や佐
渡に横たふ天の川「五月雨を集めて早し最上川」といふやうな

文化

光格天皇の御

代

文政

仁孝天皇の御

代

一九

十返舎一九

本名は重田貞

滑稽本作者

二四九一年歿

荒海や大河を歌つた句をたちどころに擧げ得るに對して、芭
蕉と共通性を多く有するといはれる西行の歌から、海や川を
扱つた作を擧げようとしても容易に擧げられない。こゝに
は兩者の相違が見られると思ふ。元祿文學は川のほとり、若
しくは海邊に發生した文學といつて差支ない。それが元祿
文學の明るく花やかな一の原因となつてゐる。近世文學は
大阪から東海道を傳はつて江戸に移る。文化・文政の文學は、
江戸といふ水邊に近い土地に生まれた文學である。文化・文
政の文學は元祿文學に比すれば花やかな明るさは尠い^{スガナ}が、そ
れは近世文學の發生・完成から爛熟に至る過程のためであつ
て、水の文學である點に變化はない。文化・文政の文學に見ら
れる繊細な味は水の味である。この時代に於て一九の膝栗

毛が現れたが、その最も中心となつたのが東海道であるのもそれを示してゐる。東海道が旅の文學の中で最も心ひかれるのは、上方と江戸との交通の中心であつた所から生ずる歴史的回顧もあるが、水邊のもつ明るい朗かさが懐かしみを與へるのであらう。水は山のやうに孤獨でなく、何人にも笑ひかけ親しみを見せる。そこに感傷と懐かしみとが生ずる。たとへば春のやうである。「春の海、ひねもすのたりのたりかな」といふ句は、春と水とが最も適當に結びつ



鴨川の流

春の海
(與謝蕪村)

島崎藤村
名は春樹
詩人 小説家
明治五年生
島木赤彦
本名は久保田
俊彦
歌人
大正十五年歿

てゐる。近世文學は大阪と江戸と東海道とによつて、代表される水の文學である。明治以後の文學もその中心は水の文學である點に近世文學からのつながりが見える。水の文學は結局都會の文學である。都會は水邊に生じ、發展する。都會は水邊のそれに限られてゐる。東京を中心とする明治以後の文學を水の文學といふのもそこから説明される。たとへば明治以後に於ては、交通が自由なため、山の文學も加はつてゐる。たとへば信州の文學の如きがそれである。島崎藤村の文學の如き、島木赤彦を中心とする短歌の如き、山の文學の要素が多く入つてゐる。山嶽の美が人の心をとらへてゐるのも、この精神の流である。

(現代隨筆全集)

與謝野晶子

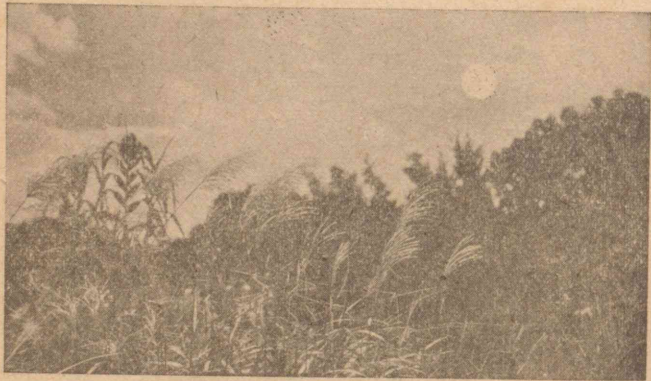
歌人
明治十一年生

二 秋の印象

與謝野晶子

私は秋を、殊に十月と十一月の秋を愛する。人は季節の風物に影響される所が多いが、春が人に觸發される所は浅い氣がする。また夏と冬とは、人が自然に壓せられて負け氣味になり、程よい飽和を得がたい恨がある。たゞ秋は人の魂の深い所に觸れて、摯實の氣を呼覺ますと共に、自然と人とが平衡の力を以てしつくりと互に抱合ふことが出来る。

秋は自然の一切が、色褪せ香衰へて凋落する直前の一榮えを示す季節である。その一榮えには微妙複雑の種々相があつて、それが各人の心の種々相と引合ひ且融け合ふ。秋が人に従ひ、人が秋に従ふ。誰が秋を讚めずに居よう、誰が秋を愛



秋の月

せずに居よう、誰が秋と一體になることを感ぜずに居よう、誰

が秋に對して反感を持ち得よう。

多感多情は人間の最も人間らしい心境である。その心境は秋に觸れ且浸ることによつて澄み深められる。秋の示す微妙複雑の種々相は、人間の多感多情の一々に適した姿を與へないものはない。

青澄んだ秋の空を見上げただけでも、人は快闊と崇高と永遠との混り合つた感激を呼覺まされ、名も無い草の一葉の黄に紅に染んだ姿を

目にしただけでも、人は纖麗と優婉エンと成熟とに含まれる形ある物の變化の哀愁アヒを覺えずにはゐられない。これに對しては、今日勝ち誇り心滿つる人も、明日の衰と缺けることを豫感し、既に衰殘の境にある人は、なほ自らの一生の最後の一榮えを求めて、意義ある「生」の極印を刻み附けようとするであらう。秋に對して浮かれ戯れようとする人はない。淺き心は深くなり、だらけた心は肅然となる。聲を舉げて泣くよりは、内にじつと涙を湛へ、涙に肉の目を曇らせるよりは、心の瞳をその涙に洗はうとする。平生書物を讀まぬ人も、秋の夜長の燈下には何物をか繕ヒトきたい。朝の驛路に霜を踏んで渡る橋、血のやうな夕燒の中に、撫でたら手の切れさうに見える遠山の薄く鋭い線、水に立つ露、百舌鳥の音、落葉の後に實を一杯に著

けたいろくゝの木、新しい穀物の香、遠い街の宵明り、秋の特殊な風物は多い。げに古人が露霜に身を苦しめて、秋の旅を好いたのは、人を卑小にする功利の生活から暫く解脱して、裸なる自由の大きな心、最も人間らしい眞實の心を、自然の中に發見しよう



秋の山路

と欲したためであつた。學ばない人も、労働に疲れた人も、秋には宇宙の深い意義に觸れて、そのために同じく深い自己に讀み及ぶ。うら寒さは、

朝夕の肌ばかりでなく、秋は人の魂にまで沁入る。この時、上根の人は哲學に、藝術に、宗教に頭を回らすであらう。私たち下根のものは、爲すなき命を欺き、子の行末を思ひ、友をゆかしみ、物質生活の貧しさを憂へながらも、なほ夕焼をめで、月明りを喜び、霜夜の汽笛にも聞入り、哀慕・幽愁の樂しみに、たとへ束の間にもせよ、放たれた闊い美しい心になる。私が秋をどの季節よりも愛するのはこれがためである。

秋を愛することは、實は、人が最も深く自らを愛することである。秋を「さびしい」といひ、はかない」といふは、人自身の奥の乏しさと弱さを秋に暗示されて、吐出す眞實の歎息に外ならぬ。人はこれがために率直に、摯實に、重厚に、愛深きものに、正しきものに、勇氣あるものに深められる。秋に笑む人は笑

みてのみは止まず、秋に泣く人は泣いてのみは止まぬ。秋の哀慕・幽愁の樂しみに觸れるので、人に近づく人生の「冬」に、如何に身構へるべきかを知り、草木と共に空しく朽ちる運命を跳ね返さうと努力する。

明らかに意識すると否とに係らず、人が秋の季節に影響せられて、自然の中に自己を發見することは、上に述べた通りに深いものがあると思はれる。私は秋を讚める。

若し地上に、夏から一足とびに冬が來るのであつたら、人はその多感多情の性質を、今のやうに發達させ得なかつたであらう。

(光る雲)

日記

三水戸のみゆき (昭憲皇太后御集)

明治二十三年十月二十六日といふ日、茨城のあがたへみゆきせさせたまふ。こは近衛兵の演習を親しく御覽ぜさせたまはんとてなりけり。みづからも従ひ奉るべく、豫て仰言ありしかば、いと嬉しくていてたつ。この大御代ならずば、いかで女の身にてかゝることを見んとおもふに、おのづから心も勇みたちてうち笑まれぬ。

御車、上野の停車場に駐る。やがて樓の上にぞのぼらせたまふ。東宮にも御送に、とくより参りたまへり。大后宮よりも典侍幸子御使に参りて、あつき仰言ども奏す。みづからも畏き御言葉承る。かくておとををはじめ、送り奉る人々多か

上野の停車場
東京市下谷區

幸子
萬里小路幸子

侍従長
徳大寺實則
公爵
大正八年歿

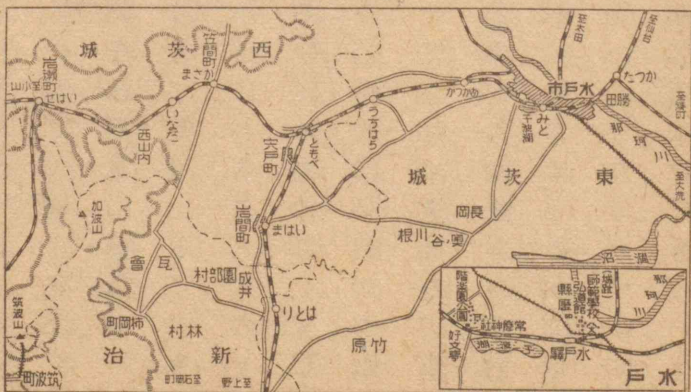
るを、もらしたまはず御前近く召して御言葉あり。ほどなく侍従長参りて、何事も整ひたりと奏す。やがて劍璽を先だてて汽車に召させたまふ。みづからも列なれる車に乗る。

笛の音きこゆるまもなく、煙をあとにして、御車はとく進みぬ。道のほど大かたは田畑にて、さのみかはれることもなし。されど、いづこも稲のみのりよきを見るは、民のため嬉しきことぞかし。埼玉のあがたは、さいつころの洪水に利根川の水あふれきとて、民のいたづきておほしたてし畑つものなどもみな荒れ果てたり。河のごとき處もありて、みゆきをろがむ人々も、あるは水に入り、あるは舟を浮かべなどす。いかにして一日々々を送りつらんとおもふに、胸いたうなりもてゆく。そこを過ぎぬれば、稲葉の浪、田のみにみちあふれたるけしき

に、心もかはりぬ。處々のさまめづらしなどいひつゞくる間に、早う水戸に著かせたまふ。

停車場より御馬車にて行在所に入らせたまふ。こは舊城内にある師範學校をそれと定めたまへるなりとぞ。とばかりありて、例の御對面のことあり。果てさせたまひし後も、いさゝか疲れさせたまふみけしきなくて、明日の演習の方略書などとうでさせて御覽ず。かく御心に懸けさせたまふを見奉るも畏し。この夜も常のごとく

師範學校
茨城縣師範學校



- 水戸市の西
- 有栖川宮
- 熾仁親王
- 陸軍大將
- 明治二十八年
- 墓
- 北白川宮
- 能久親王
- 陸軍大將
- 明治二十八年
- 墓
- 岩間村
- 水戸町の南

十一時に大殿籠りぬ。

二十七日、今日もてけよし。八時よりいでたゝせたまふ。汽車にて水戸といふ處までわたらせたまひ、それより金華山と名づけたる御馬にめさせたまふ。有栖川宮、北白川宮をはじめ、おとゞその外あまたの人々、近衛の將校なども馬にて従ひ奉りぬ。みづからは馬車にてゆく。

岩間村に到らせたまふころ、をちこちに煙たちのぼり、銃の音こゝかしこに聞えて、赤白の旗、風にうち靡き、馬のいなゝく聲も處々に聞えたり。戦鬨ならんとおもふころは、銃の音も絶間なきに、御心勇ませたまひて、折々はことかたに御馬進めさせつゝ、ねもごろに御覽じたまふ。折しも、秋の末つ方なれど、日かげはなほ暑く覺ゆるに、さらに厭はせたまふみけしき

もなきを、この演習に出でたる兵どもはさらなり、文武の官人
なべて畏み奉るなるべし。ほどなく終りぬと奏するより、御
野立にて、しばし憩はせたまひ、さて汽車にめして行在所へ還
らせたまふ。

成井村
岩間町の南
筑波山
茨城縣筑波・
眞壁・新治三
郡の界にある

二十八日も昨日の時刻よりいでたまひて、こたびは成井村
にて御覽あり。筑波山近く見えて、景色いとよし。大方は昨
日のごとし。されど今日は敵の近づきたりと見えて、大砲小
銃の音烈しく、廣き原にも響き渡りぬ。上には例の御馬にて、
道も定めさせたまはず、森の中、松の林などに分けいりて見
ぐらせたまふに、木の枝の御鐙にかゝるも、いと畏し。みづか
らも車よりいでて小銃の連發又は大砲のうちかたなども見
ずやと附添へる士官のいふに、さらばとておりたつ。黒煙た

ちのぼる中に火氣見えて、烈しき音の聞えたる、いと勇まし。
事あらん日は、親妻子をも顧みず、君のため命を捨てて戦ひな
んとおもふに、いとたのもしくはあれど、又いたはしくて、胸も
ふたがるこゝちぞする。

小松宮
彰仁親王
元帥陸軍大將
明治三十六年
薨

縣廳
茨城縣廳

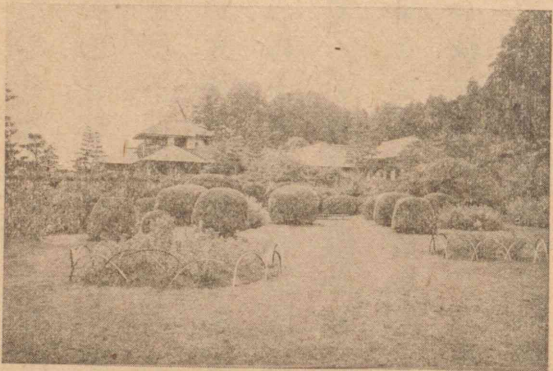
今日の演習も果てぬれば、御野立にて晝のおものきこしめ
す。それより御馬上にて觀兵式、分列式御覽ず。みづからは
例の馬車にて見る。終りて審判あり。小松宮はじめ將校う
ち集ひて御前に進む。兩日のいたづきを犒ひたまふ御言葉
あり。かたじけなみ奉りて敬禮するさま、見るもめでたし。
小松宮には兩日の演習のよしあしを高らかにことわりたま
ひぬ。しばし御休ありて、汽車にて行在所に歸らせたまふ御
道よりおぼしたゝせて縣廳へ臨幸ならせたまふ。今日はあ

やにくに御風のこゝちにて例ならず見えさせたまふをもて
かくして、かく勉めさせたまふいと畏し。

みづからは仰言によりて常磐公園なる好文亭といふ處に
ゆく。いたりつけば、徳川昭武その外人々いで迎へたり。梅
あまた植ゑたる林あり。こは事ある時のために實を貯へん
とてなりとぞ。さまざまの木立ありて庭の作りざまいと面
白し。老松のかげに石の碁盤將棋盤据ゑおきたる、めづら
かにて、しばしたち寄りて見る。高き處なれば、家のうちより仙
波湖見渡さる。十五夜の月のさしのぼるけしきいとよし。
色づく小田も見おろされたり。こは中納言齊昭の世を遁れ
て後、心やすくすまひして民のなりはひを見んために造りし
といふ。さもあるべくおもはる。家の内廣らかにて、杉戸に

常磐公園
水戸市の西郊
好文亭
常磐公園西南
隅
徳川齊昭の創
建
徳川昭武
徳川齊昭の子
舊水戸藩主
明治四十三年
歿
仙波湖
水戸市の東南

弘道館
弘道館公園内
にある舊水戸
藩の學校
齊昭の創建
記
弘道館記
徳川齊昭の撰
文し且書した
もの



常磐公園好文亭

は詩の韻字残らず書かせて、詩人を招く時のためとし、又五十
音、てにをはを書かせて、歌人のためとしたる、心しらひのあつ
さをおもふに、いとゆかし。又板敷
あり。こゝは心ある人々にをりを
り酒など與へし處なりとぞ。たち
かへる道のほど弘道館の碑を見る。
八角の堂のうちに寒水石の大きや
かなる立てり。世に知られたる記
を自筆のまゝほりいれたるなりけ
り。一句々々読みもてゆくに、その
人の御國をおもふ心ざし慕はれて、
涙ぐまれぬ。扉には、こまやかなるほり物あり。鴨居とおほ

しき處には、易の八卦を彫りつけたり。昔はこゝに學舎あまたありきといふ。げにめづらしき處を見しかな。これも上の仰言なくばといと嬉しくて、時の過ぐるも覺えず。人々夜更け侍りぬべしといふに驚かされて、急ぎ還る。月夜なれど、篝火焚き、提燈などあまた照らして晝のごとし。

御前に參る。上には六時ばかりに歸りまし／＼きと聞き、て、おくれ侍りぬなど奏するに、うち笑ませたまふ。好文亭のことなどつばらかにとおもへど、とみにいひつくすべうもあらねば、かたはしのみ奏す。記さまほしきことども多かれど、筆も進まず。ことに明日東京へ還りまさんとて御調度ども取納むるに物騒しければ、書きさして止みぬ。

布村安弘

歴史家

明治三十二年

生

取島縣

蓮月尼

布村 安弘

明治維新が、あれ程大きな變革であつたに係らず、そのために、人命財貨を犠牲にすることが比較的少かつたことを、外國人の中には一つの奇蹟に數へるものもあるが、それは我が固有の優れた國體の然らしめるところであることは勿論であるが、そこに尙附加へられねばならぬものがある。

その一つは、維新の際に我が婦人に依つて示された没我的な民族愛、抱擁的な調和性である。静寛院宮を初として土御門藤子・山岡英子等の人々の行爲は、一つはこの日本婦人の特性から出てゐるもので、これが即ち明治戊辰の慘禍を輕減する役割を果したと考へられる。

土御門藤子

陰陽頭晴親の

四女

和宮の乳人

明治八年歿

山岡英子

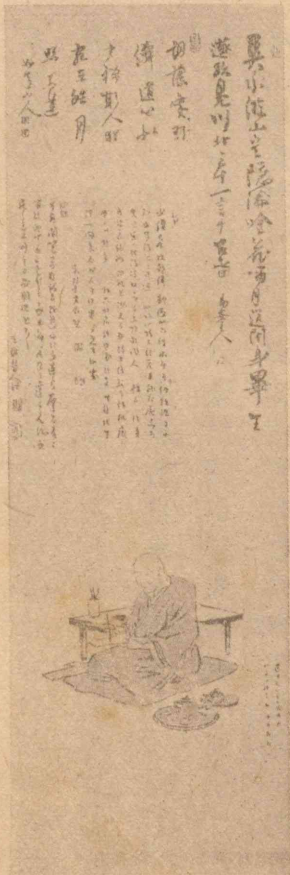
山岡鐵舟夫人

明治三十三年

歿

太田垣蓮月
歌人
明治八年歿

太田垣蓮月は、以上の婦人のやうに、實際政治運動の渦中に身を置いてゐたのではなかつたが、また別の意味で戊辰の慘害を防止し、新時代の創建を促す力となつた人である。



蓮月
は土を
捏ねて
雅趣に
富んだ

急須などを作り、得意の麗筆もて三十一文字に深い心ばえを託して、全く浮世を捨てて顧みようとしなかつた一個の隱遁者のやうにも見受けられるが、實は人間への愛著、世間への關心の、斷たうにも斷つことの出来ないといふ一面があつて、人

を憶ひ、國を念ふ熱情家であつた。

成程、蓮月は、信仰と趣味に没入した三昧の生活に生きたいと、常に冀つてゐたことは、その友人知己に宛てた書信の中にも窺はれるところであるが、全く世間を捨ててしまふには、餘りに多感であつた。殊に時は未曾有の大變革に當面して、日本國舉げて激動の最中、感受性の強い老尼の胸奥に、世の雜音が響かないでは措かなかつた。

この頃世の中のことども、何くれ
と人のいひしろひ侍るを聞きて
ゆめの世とおもひすつれどむねに手をおきて
ねし世のこゝちこそすれ

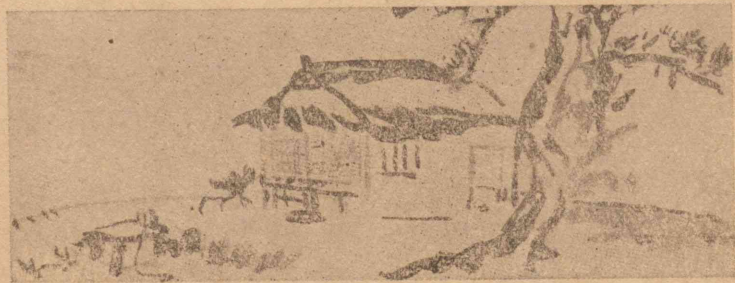
但馬
現兵庫縣の内

この歌は慶應元年初夏の頃、親戚なる但馬の太田垣知足宛

彦根
現滋賀縣彦根市
元井伊氏の城下町

の書翰に見えてゐる。又慶應二年五月朔日附て、知人なる彦根藩士西村有年に與へた書信の中にも載せてある。その頃の蓮月はかうした不安の中に魔まされるやうな心苦しい思に悩まされたのであつた。世の風雲次第に險しくなり、維新の大活劇が愈最高調に達した頃、同じく知足翁に宛て、京都の近況を報じた消息文の中に、次のやうに記した。

十二月二日頃より、何かと京中さわがしく人々心ならずし、ざい、ざうぐ、こゝかしこもちほこび候内、又四五日しづ



蓮月庵

ふしみ

現京都市伏見區

はし本

現京都府綴喜郡八幡町宇橋本

仁和寺宮様

後の小松宮彰仁親王

はつゞ様

薩摩藩主島津久光

西加茂

現京都市上京區 賀茂川の西岸

神光院

眞言宗醍醐派の寺

まり候よし申す内、十日より何もかも御へんかくのよしにて、十二三日ごろより又々さわぎたち、又しづまりいたす内、正月三日の夜より、ふしみよりいくさはじまり、きのふははし本まで、くわんぐんの御かちのよし、この末いかゞなり候や、仁和寺宮様くわんぐんの總大將にて、にしきの御はた日月うちたるを御もたせ、東寺までお出まし遊ばされ、さつま様御はたがしらにて、日の丸のしるし、みなく、日の丸のあふぎにて御出陣のよし、つひにしらぬことのみおそろしく、ちひさうなつて神佛のみ拜み居參らせ候

慶應三年の末頃から今年戊辰の初頃までの都の政情が、簡單ながらもざく、と目に見るやうに描寫してある。この騒劇の最中であつて、蓮月がその寓居である西加茂神光院の庵

室で、何事を神佛に祈誓してゐたであらうか。

伏見にいくさありとて、火具の音

のいみじく響きわたりけるをり

よそに聞く音もはげしき時津風花のみやこを

散らさずもがな

蓮月尼筆
あはれきこゆるはるのれつるし
あやまこところとさるるたふら

蓮月尼筆

戊辰の年正月三日の夕方、伏見街道で會津・桑名の兵士と薩長兵との間に戦の火蓋が切られ、四日朝鳥羽の横大路邊で朝幕兩軍の大衝突、兵火は起り黒煙天を蔽ひ、銃砲の音は轟いた。七十八歳の老尼の耳にもそれと感ぜられたであらう。この

惨事を目前に見ながら、先づ願ふことは花の都の文化が破壊せられざらんことであつたが、尙それにも増して、尼にとつていとしきは人の子の命であつたのである。

ふしみよりあなたにて、人あまた

うたれたりと人の語るを聞きて、

聞くまゝに袖こそぬるれ道のべにさらす屍は

誰が子なるらん

正月三日の夕方から始つた戦闘は、四日五日と續き、六日に至ると幕府方の全軍は潰え、悉く大阪を指して敗走した。この日將軍慶喜は密かに大阪を脱して、海路江戸へ逃げた。この間の戦闘に、敵味方の討死するもの尠からず、路傍に打捨てられた戦死者の惨狀を、蓮月自ら目睹したのではないが、人傳

に聞く凄じい光景に、人の子を念オモふ情深い蓮月は、思はず落涙するのであつた。

有栖川宮
熾仁親王
一九頁参照

正月七日早くも慶喜追討の令が出た。二月三日有栖川宮が征東大總督となられ、東海・東山・北陸の三道から、幕府討伐の軍が差向けられた。この時に當り、信仰に養はれた博く深い慈悲の眞情から蓮月は一人でも一物でも犠牲の少からんことを、官軍のためにも、また幕府のためにも祈つたに相違ない。その頃詠んだ次の歌は、この心持をよく寫し出してゐる。

戊辰の初ことありしをり

うつ人もうたるゝ人も心せよおなじ御國の御

民ならずや

あたまかたかつもまくるもあはれなりおなじ

御國の人とおもへば

官軍といひ、幕臣といふも、同じくこれ皇國の御民である。一方は、幸に大義を踐んで堂々正道を行くことが出来たが、他方は、不幸にして邪路に奔り逆賊の地位に立つた。その中には、無智にして舊俗に泥み、大義に昏いものもあつたが、多くは環境と機會とが彼等を驅つて、已むなくこの逆境に立たしめたのであつた。いづれにしても皆一つ國土に孕まれた同胞である。その行は憎んでもその人を憎まず、もつと廣い人間愛をもつて抱擁したいといふのが蓮月の本意であつた。仇と味方とが互にあはれを懸けあふところ、恩讐の彼方には最早争闘はない。かくして得られる正しき平和こそ、蓮月の最後の念願であつた。

右の歌が征東軍總督參謀西郷隆盛に、その京都首途に際して贈られたといふ傳があり、またそれを否定する説もある。西郷がこの歌を受けて大いに感ずるところがあり、江戸城の明渡が平和に済まされることになる一つの機會を作つたといふやうにも語られてゐる。これらの傳説がすべて後日の作りごとであつても關はぬ。この歌のもつ重大な意味は他にあるのである。即ち鬭争でなく、協力に依つて、建設の事業が成されるといふことである。明治維新が破壊時代から建設時代に入り行くことは、時勢に先がけする天才の感覺に早くも映ずるわけで、蓮月の詩心に依つて、左様な動向が早くも指示されたことは大いに注意すべきではあるまいか。

(明治維新と女性)

阿佛尼

藤原爲家の妻

歌人

一九四三年歿

壁の中

魯ノ恭王人ヲ
ンテ夫子ノ講
堂ヲ壞タシム
壁中ノ石函ヨ
リ古文孝經二
十二章ヲ得タ
リ

(古文孝經一
孔安國の序)

書さおけるあ
と

爲家の遺書

神樂のことば

あはれ あな
おもしろ あ
あなたのしあ
なさやけを
け(古語拾遺)

五 しゃよひ

阿 佛 尼

昔壁の中よりもとめ出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。水莖の岡のくず葉かへすも書きおけるあとたしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。又賢王の人を捨てたまはぬまつりごとにも漏れ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるるものは、かずならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、又さてしもあらでなほこのうれへこそやるかたなく悲しけれ。更に思ひつゞくれれば、やまと歌の道は、たゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。日のもとの國に、天の岩戸ひらけし時、よもの神だちの神樂のことばをはじ

世を治め
(古今集序)
この道のひじり

紀貫之等

二たび勅を

藤原定家は新

古今・新勅撰

二集の撰者

為家は續後

撰・續古今二

集の撰者

三人のをのこ

定家「為家」

「為氏(母宇都

宮頼綱女)

「為相(母阿佛

尼)

「為守(母同

右)

細川のながれ

為家から為相

に譲つた揺磨

國細川の莊

めて、世を治め、物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ、この道のひじりたちは記しおかれたりける。

さても又集を撰ぶ人はためしおほかれど、二たび勅をうけ

て代々に聞えあげたるは、

たぐひなほありがたくや

ありけむ。そのあとにし

もたづさはりて、三人のを

のこどもも、ちの歌のふ

るほぐどもをいかなる縁

かありけむ、預りもたることあれど、道をたすけよ、子をはぐく

め、後の世を弔へとて、深きちぎりをむすびおかれし細川のな

がれも、故なく塞きとめられしかば、あと弔ふのりのももし火



阿佛尼像

子を思ふ心の
やみ

人の親の心は

やみにあらぬ

ども子を思ふ

道にまどひぬ

るかな(藤原

兼輔、後撰集)

み冬たつはじ

め

一九三七年十

月 為家の歿

した翌々年

人やりならぬ

道

人やりの道な

らなくに大方

はいきうしと

いひていざ歸

りなむ(源實

一古今集)

も、道を守り、家をたすけむ親子のいのちも、もろともにきえを
あらそふ年月を経て、危く心細きものから、何としてつれなく
今日まではながらふらむ。
惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心
のやみは、なほしのびがたく、道をかへりみるうらみは、やらむ
かたなく、さてもなほあづまの龜の鏡にうつさば、くもらぬか
げもやあらはるゝと、せめて思ひあまりて、よろづの憚りをわ
すれ、身をえうなきものになしはてて、ゆくりもなくいさよふ
月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。

頃は、み冬たつはじめのさだめなき空なれば、降りみ降らず
み、時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつ
つ、事に觸れて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いき

侍従

為相

冷泉家の祖

一九八八年歿

大夫

為守

うしとても、とゞまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。

目かれせざりつるほどだに、荒れまさりつる庭も籬もまし

てと見まはされて、したはしげなる人々の袖のしづくも、慰め

かねたるうちにも、侍従大夫などのあながちにうち屈したる

さまいと心苦しければ、さまゝいひこしらへつ。

代々書かれける歌の草子どもの奥書などして、あだならぬ

限りをえりしたゝめて、侍従の方へ送るとて、書添へたる歌、

和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草これを昔

の形見とも見よ

あなかしこ横波かくな濱千鳥一かたならぬ

跡を思はば

(十六夜日記)

上田秋成

國學者 歌人

讀本作者

二四七〇年歿

鎌倉の大將殿

右近衛大將源

頼朝

六 銀の猫

上田 秋成

文治その年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣てさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人々、み先追ひ、

御あとべ仕うまつれる、渚に遊ぶ蘆田鶴のあゆみして、疾から

ず、遅からず、列を亂さずねり出でさせ給へるを、大路に膝折り

ふせ、畏みたてまつれる人あまたあるに、お前拂してあなとだ

にいはず、世にかめしく貴き御有様なり。

廣前を罷りて、御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣のもと

に畏まりをる法師のあなるが、見上げ奉る面つき、なほ人なら

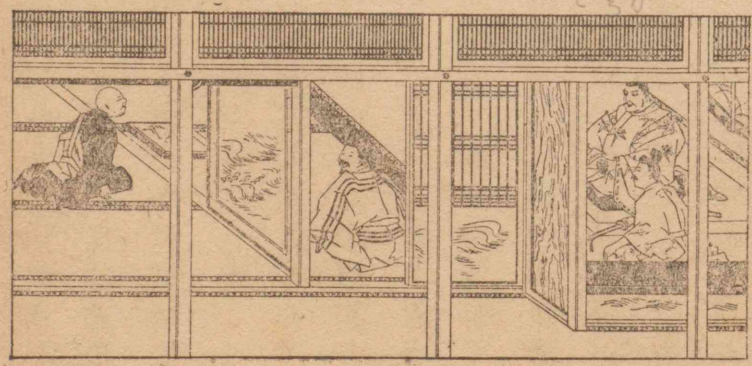
ずおぼしけん、御輿ぞひの若侍して問はせ給ふ。ゆくりなき

に驚きたるさまして、雲水にありか定めず侍るものにて、名は

圓位
西行
穴熊の
西伯曰ク獲ル
所龍ニ非ズ
影ニ非ズ
虎ニ非ズ
影ニ非ズ
ズ
(史記)

圓位と申すといふ。聞し召されて、さればこそ聞知りたれ。穴熊のたけき獲物の類ならで、賢き人得たるためしに、誘ひかへらん。わがあとにつきて來れといへ。とて召連れさせ給へり。
御館に入らせ、御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあまた照らししか、やかせ給ひて、御座近き處の一間なる簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黒うやつしたれど、月花のなげきの譽は、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。弓取りし人のもとの心の猛きには、よむ歌も直くあからさまにと聞くはまことか。歌はものゝふの荒々しき心には詠みうつすまじきものに、宮人達は沙汰し給へりとや。軍に

出立ちて、笛鼓の音馬のいなゝき物とも思はぬを、この三十字あまりの學びには、心の後るゝはいかに。こはかしこき御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢とらして、軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛く直々しく、調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まんとては、ますらを心をとり隠し、あてになよびかに詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき煩ひなれ。君がさと



圖のふか向に行西朝頼

大風起り

揚ス威海内ニ

加ハリ故郷ニ

歸ル安ゾ猛士

ヲ得テ四方ヲ

守ランメン

(漢高祖一史

記)

烏鵲南に

月明ラカニ星

稀ニ烏鵲南ニ

飛ブ(魏曹操)

秀郷

藤原秀郷

西行九代の祖

鎮守府將軍

く猛き御心のまゝにうち詠ませ給はんには、今の世の人たれ
かは立ちあへ奉らむ。三尺の劍を執りて、大風起り、雲飛揚す。
とうたひ壟を横たへて、烏鵲南にと詠ぜし君たちは、鞍の上
て文に遊ばせ給ふならずや」といふ。

「人々、あれ聞き給へ。世は捨てたれど頼もしき人の心なら
ずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓矢の上
手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそとお
ぼししみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にても
教へ承るべし。』こは益、恐ある御問はせなり。御物語のはて
はては、つはものの道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山を
すみかの瘦法師にさへ物問はせ給ふことの忝さよ。向かひ
奉りては、をこがましく家の傳へなりなどとして聞えや奉るべ

士卒の疽を病
めるを

韓の吳起

竈を滅して

齊の孫臏

き。ましてありがたき大宮仕を否み奉り、親のいつくしみを
さへあだなるものにして、年わづかに二十三にて家を出てた
るいたづらものの、弦ひき一つだに心に留めしことも侍らず。
たゞ一言の忘れがたきは、賞を重くし、罰を軽くせよ。』といひし
と、任ずるものを辱しむれば危し』といひしありがたさよ。士
卒の疽を病めるを吮ひしは、人の心をよく買ひなすといへど
も、まことの情よりも覺え侍らず。竈を滅じて人を危きに
陥るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下をしるべき君
の御心にあらず。軍を出し給へることの、あやしきまで賢く
ませるを、餘所ながら聞き奉るには、この御問、ゆるさせ給へ』と、
額を板敷に擦りつけて申す。

君笑みほこらせ給ひ、口とく心さとき法師なり。今宵は月

見る夜ぞ。物語いまは果してん。人々と土器をとりはやし、
曉かけて遊ばん。まれ人は酒飲まざるべし。鹿猿のなかに
立ちまじはりて、歌詠めといふとも詠むまじ。たゞわが前に
遊べ。風冷やかなるにもあかず飲みものきたなげに食ひち
らす人々は、あたゝかにもこそ。この火とり法師に參らせよ。
とて、白銀もて作りたる猫の形したるをとり傳へて、君より賜
はる。とて、前に置きたり。「鹿猿はなほ心猛し。鼠をだにえと
らぬ瘦法師がためには、似つかはしき御賜ぞ」とて、三度おしい
たゞきぬ。

あした御暇賜はりて立ちいづるに、御館の人やどりに、誰が
殿の童ならむ、くゞり袴の裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに
ゐるを見て、これ取らせむ。火埋みて手足あたゝめよ」とて、か

のきら／＼しき物を與へて、顧みもせず立去りぬ。

童が主なる人いとあやし。大將殿の法師に賜はせしを、い
かて童に得させけん」とて、まづ急ぎて、聞え奉る。君うち笑み



西行法師

給ひ、かの法師あなづらはしくをさなげなる物くれしとて、腹
だたしくや思ひけむ、わが門の前に捨てゆきつるよ。法師と
ても、男魂なくば修行もえせぬなるべし。されど家を出でて、
なほ身を守り、才にほこりて野山にまじり、歌詠みてのみある

は、世捨人の捨てらるべきあさましさぞかし。一度けがれしもの、その童に取らせよ。とて、取りおろせ給ひぬ。

西行後にこの事を人に語りていふ、右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人みなこの君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふものを生まれながら得させけむ。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、この後やう／＼衰へさせ給はむ世の姿なるは、とて、涙とゞめがたくして物語りしとなむ。心なき身にも、これを聞傳へては、秋の夕暮ならずとも、うちひそみぬべし。

(藤篋冊子)

漢高 漢の高祖劉邦 皇紀四六六年 歿
曹孟徳 魏の太祖武帝 皇紀八八〇年 歿

心なき身にも
心なき身にも
あはれは知ら
れけり 鴨立つ
澤の秋の夕暮
(西行)

七 蘆の枯葉

西行

四頁参照

西

行

おぼつかないづれの山の嶺よりか待たる、花の咲きはじむらむ
おしなべて花の盛になりけり山の端ごとに
かゝる白雲
道のべに清水流る、柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ
くまもなき月の光にさそはれていく雲井まで行く心ぞも
年たけてまた越ゆべしと思ひきやいのちなり

小夜の中山
現静岡縣小笠
・榛原兩郡界

けり小夜の中山
こゝをまた我住みうくてうかれなば松やひと
りにならむとすらむ
津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風お
たるなり

源 實 朝

さくら花散りかひかすむ春の夜の朧月夜の賀
茂の川風
空や海うみや空ともえぞ分かぬ霞も波もたち
満ちにつゝ
大海の磯もとゞろによる波のわれて碎けてさ

那須
栃木縣那須郡

けて散るかも
難波瀉あしの葉白くおく霜のさえたる夜半に
たづぞ鳴くなる
ものゝふの矢並つくろふこての上道具に霞たばし
る那須の篠原
物いはぬ四方のけだものすらだにもあはれな
るかや親の子を思ふ
時により過ぐれば民のなげきなり八大龍王雨
やめたまへ
ひむがしの國にわがをれば朝日さす藐姑射の
山の陰となりたけにき

榎本其角

又寶井氏

世蕉の高弟

二三六七年歿

歳尾

元禄十五年

二三六二年

都文公

土屋主税

本所松坂町吉

良家の隣家

杉風

姓は杉山

芭蕉の門人

二三九二年歿

堀部彌兵衛

名は金丸

大高源五

名は忠雄

號は子葉

ハ義士の討入

榎本其角

歳尾の御壽として、例年の如く、遠路の處酒料一封、露の鹽漬一桶贈り下され、御厚志の程幾久しく受納致し候。御序に御家内始め御社中へもよろしく御傳へ下さるべく候。然れば、去る十四日、本所都文公に於て年忘の一興御催あり。嵐雪杉風我等も一席にて、折から雪面白く降出し、風情手に取るが如く、庭中の松は雪を戴き、雲間の月は闇を照らし、風興今は捨て難くして、夜唯更けゆき、最早丑三つ頃になり、犬さへ吠えず、打靜まり、文臺料紙も押片寄せ、四五人集りて蒲團を被ぎ、夢の浮世といふ間もあらせず、劇しく門を叩く者兩人玄關に案内し、我等淺野家の浪人堀部彌兵衛大高源五、

今夕御隣家吉良上野介屋敷へ押寄せ、亡君年來の遺恨を果さんため、大石内藏助始め四十七人、唯今吉良殿を討取候間、御隣家の御よし、み、武士の情、萬一御加勢も候はば、末代の御不覺と存じ奉り候。願はくは門戸を厳しく御防ぎ、火の元御用心下され候はば、忝く存じ奉り候。といひも果さず立出づる、その風情、神妙なる事いふべくも非ず。今は俳友もこれまでなりとて、其角幸に爰にあり、生涯の名残を見んとて、門前に走り出づれば、各吉良家に忍び入り候程に、わが雪と思へば、かろし笠の上

と高々と一聲よばはり、門を閉ぢて内を守り、堀越しに提燈ともし、始終を伺ふに、その哀さ骨身に浸み、女人の叫、童子の泣聲、風飄々と吹誘うて、曉天に至りては、本懐已に達したり

大石主税
名は良金
良雄の子

とて、大石主税、大高源五、物穩便に謝儀を述べたる事、あつば
れ、武士の譽といふべし。

日の恩やたちまち碎く厚氷

申し捨てたる源五が精神は、なほ眼前に忘れ難し。貴公、年
來の御入魂故具に認め進じ申し候。早春の内かれこれ御
差繰り御出府候はば、かの落著も承り届け、餘儀なく伏劍に
及び申し候はば、竊かに追善をも相營み申すべく候。先づ
は餘日も之なく、書餘責面の時を期し候。恐々謹言

十二月二十日

其角

文麟
鳥居氏
其角の門人

文麟様

月雪の中や命の捨てどころ

長谷川如是閑

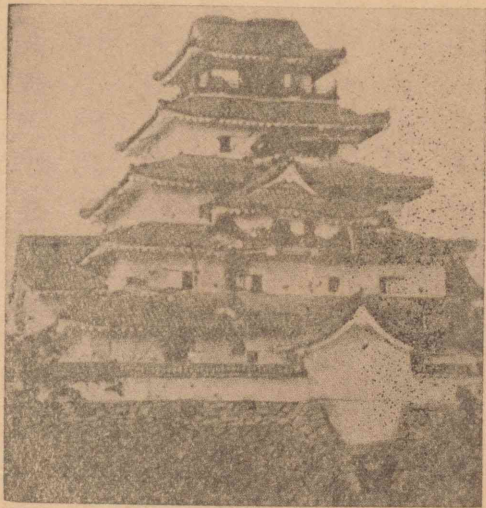
名は萬次郎
評論家
明治八年生

九城

長谷川 如是閑

城は支那では都市を圍む城壁で、日本の城の天守閣のやう
な中心的建物は無いが、併し雄大莊嚴な城門や望樓やがある。
日本は寺院等の大建築では支那を學んでゐるが、城に於ては、
全くその支那の系統を追はずに、日本固有の感覺を基調とし
てゐる。而してそれは、日本の戦争の實用から、さうした外國
の形式をとり得なかつたのかといへば、必ずしもさうではな
い。尤も、地震等の關係から、建築の材料に石を用ひることを
しない爲もあつたらうが、併し支那の城門にも木造のが少く
ない。日本の城が支那の城門や城壁やの形式に追隨しなかつた
のは、さうした實用又は材料の關係からばかりではなく、

武門時代の文化的感覺の質によつたもののやうに想はれる。而して日本の城はその構造こそ日本相應の軍國的規模を



天守閣

もつた相當雄大なものだが、その文化的表現の感覺の基調は、寧ろ日本固有の神社建築のそれに似た、直線的の單純で靜肅の感じである。白色を基調としてゐるのも、日本人固有の色彩感覺に返つたもので、神社までが赤い色彩を塗抹する大陸風を取入れてゐるのに、それを反撥して、白色を基調としたのも、武門文化の感覺の素

質を示してゐるものといへよう。

日本の城は、戰國の末期に漸く形式の完成したもので、十分戰爭の經驗に基づいたものではあらうが、それは寧ろ、戰を超えた文化的形式として、いはば武門文化の一つの標本的表现形式になつてゐる。軍國的建築の威力的効果よりは、文化的建築の感覺効果をもつた表現である。西洋にも支那式の都市城壁の外に、居城としての城があつて、それはやはり大陸文化的の誇張煩瑣の特質を發揮して、その點に於て、建築史上、日本の城よりは進歩してゐるといへるが、日本の城は、さうした封建工藝の煩瑣性に陥らず、又支那建築の形式に追隨せず、日本の單純性を保ち、又日本武士の一面にあつた謹直端正の氣質を示してゐる。誰でも、あの名古屋城が外濠の石垣の松

樹の上に聳えてゐるのを見て、支那の城壁や西洋の城に對した場合のやうな威壓は感じないであらう。さうして、寧ろその單純にシンメトリカル（つうじょうりかる）の直線的構成以外の何物をも誇示してゐない淡白な姿に、親しみを感ずるであらう。實際、わが國の城を中心として濠をめぐらした一帯の景色は、その濠に臨んだ千姿百態の松樹の景觀とともに、造庭術の一つの優れた形式である。殊に江戸城のやうに、聳え立つ天守閣をもたない廣大な城郭は、都市の中心構造としては、全く世界の都市に類例のない人工的自然の景觀を示してゐる。それが現代の戦争の實用を失つた後にも、何の邪魔物ともならないのみか、近代都市に望んでも決して得られない一種獨得の中心的存在となつてゐるのである。

(日本の性格)

柳宗悦

民族藝術研究

家

同志社大學教

授

明治二十二年

生

一〇 民族と藝術

柳 宗 悦

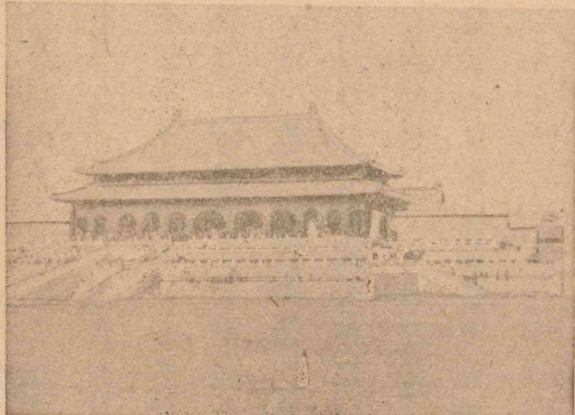
藝術は民族の心の現れである。如何なる民族もその藝術に於て自らをまともに語る。一國の心理を理解しようと思ふならば、藝術を理解するに如くはない。美術史家は必然に心理學者である。現れた美に心理の閃を讀む時、彼は眞の美術史家たり得るのである。若しも一國の藝術を理解するならば、嘗に我々はその美の特質に就いて知り得るのみならず、その表現を通してその民族が何を求め何を訴へたかを聞く事が出来るであらう。

自然と歴史とはいつも藝術の生みの母であつた。自然はその民族の藝術に取るべき方向を定め、歴史は踏むべき経路

を興へた。一國の藝術の特質をその根柢に於て捕へようとするなら、我々はその自然に歸りその歴史に入らねばならぬ。しかも特質は比較によつて一層鮮かに浮かび出るであらう。極東を形作る三個の國即ち支那と日本と朝鮮とが如何なる對比をなしてゐるか。私はこれを省みる事によつて、その國固有の美を訪ねようと思ふ。總べては同じ東方の氣質に、同じ文化の流を受けてはゐるが、その自然が異なり、歴史が異なるにつれて、藝術もその色調を鮮かに變へた。

支那はどこ迄も大陸であり大國である。横ざる河は茫大であり、聳える山は巨大であり、廣がる原野は無限である。地は古く石は固く、氣候は激しく暑く、烈しく寒い。そこに生きようとする者は、これ等の偉大な力にふさはしい強さを持つ

た者でなければならぬ。この大地を歩く者は、安定なる足と

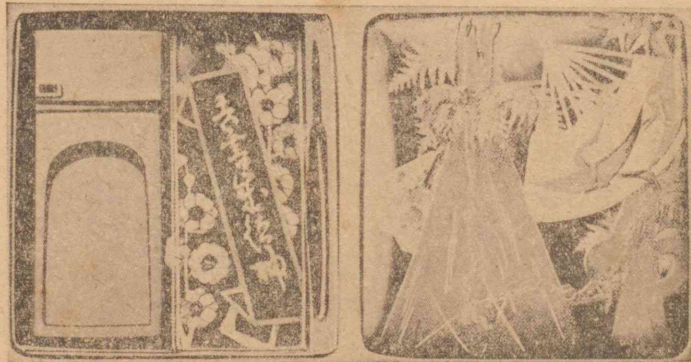


紫 禁 城

壯健なる體とを持たねばならぬ。そこは偉大な地の國である。支那に現れた思想といへば地の教、儒教ではないか。民族が持つ性情は忍耐強く、如何に確にこの世の實際に堪へ得るかを語つてゐる。建築も巨大にして平坦である。それは正しく不動の形をとつて地に横たはるが爲ではないか。支那の歴史とはこの巨大な空間の上に起つた偉大な興亡である。戦は激しく、城壁は高く、畫策は遠大であつた。い

づれの時代も誇るに足る特殊な文化を産出した。一世を導く者は時代を制御する不撓な意志の權化であつた。かくして幽玄な思索や宗教が榮え、悠大な文學や詩歌が現れ、堅實な繪畫や工藝が後を追つて續いた。總べては刺激が多く、重く、鋭い。自然それ自身が弱いものもの存在を許さぬ。人は肥満し、動物は辛抱強く、食物は油ぎり、音樂は裂けるやうだ。

僅か一日餘りの航海で我々が日本に来る時、如何に異なつ



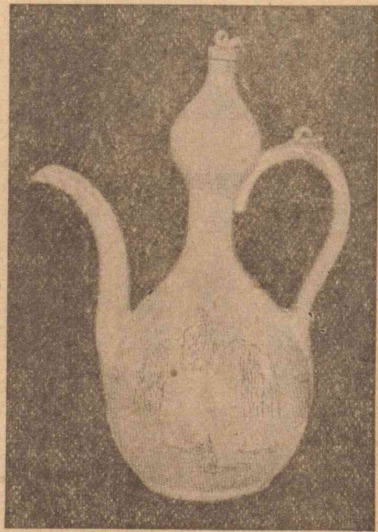
箱 硯 作 悦 光

た光景が視野に入るであらう。自然は龐大な大陸から可憐な島國へと移るのである。濁る河は澄み、灰色の峯は緑の丘に變る。自然に起伏する線は穩かとなり、野邊は園生のやうに花に飾られてゐる。波の音は汀に囁き、微風は松の梢に歌つてゐる。空氣は濕り土は柔らかく、氣候は溫和である。國は海に守られ、自然は人情を柔らげてゐる。どうして歴史はかゝる環境の中にあつて苦痛の歴史であり得よう。民族は外寇の恐なく、その皇統を長く續けた。恐怖なき民族にはこの孤島は一つの樂園であつた。生活は餘裕を持ち、人は情趣に耽つてゐる。この國に於てほど嗜好に時間を楽しんだ類例は他にないであらう。力とか重さとか幅とか、人はかゝるものを要する機縁を持たない。美しさと優しさとが彼等の

心に溢れてゐる。激しい自然に抗する力に彼等の生命があつたのではない。柔らかな静かな自然に従ふのが彼等の生活であつた。

この明らかな對比の間に、朝鮮は如何なる位置を占めたであらうか。そこは大陸でもなく島國でもない。そのいづれでもない半島であつた。半島であるといふ事が、やがてこの國に運命の方向を定めた。南は多島の海に圍まれて、人は生活を樂しまうとしながら、北は大陸の重荷に壓せられて、安らかな生命を得ないであつた。人情は何處に長への住家を定むべきかに惑つてゐた。前に温かい光を見つめつゝ、背には寒い風の音を聞かねばならなかつた。心は自由を欲して大海に出ようとしながら、體は大陸に固く結ばれてゐた。地は彼

等にとつて平安な國ではなかつた。かゝる國土に現れた歴史が、樂しさを缺き強さを缺いた事は已み難い命數であつた。絶間ない外來の壓迫によつて、一國の平和は永く續かず、民は力の前に仕へよと強ひられた。朝鮮に於ての歴史は實に對外の歴史であつた。しかも事大を餘儀なくされた歴史であつた。新羅の幸な統一も束の間、に過ぎた追憶であつた。人々はどんなに釋放を求め獨立を希つたであらう。その望が地に絶えた時、如何に無常の感に打たれたであらう。彼等は信じ得べき何ものをも地上に見



朝鮮の壺

出し得なかつた。總べての四圍は彼等を虐げるやうに見え、誰も彼等を力附けようとはしなかつた。彼等は力なく疲れ、今日も今日は活きる、だが明日も活きると誰が保證し得よう。まして自由に快活に生命を味はひ得るとどうして望み得よう。情は内に燃えても、外に焰となる勢を持たなかつた。かくして心は動き亂れてゐた。苦しみや淋しさが身に沁渡つてゐた。地上の望は彼等には薄かつた。残る彼岸に望を託さねばならなかつた。何事かを夢み何事かに憧れ、悶えを内に匿してゐた。動搖と不安と苦悶と悲哀とが彼等の住む世界だつた。

そこでは自然すらも寂しげに見えた。峯は細く、樹はまばらに、花はあせてゐた。地は乾き、ものは潤されず、室は暗く、人

は小さかつた。藝術に心を託す時、彼等は何事を訴へ得たであらう。音に強い調もなく、色に楽しい光もない。たゞ感情に溢れ、涙に充ちる心があるのみであつた。現された美は哀傷の美だつた。悲しみのみが悲しみを慰めてくれた。悲しき美が彼等の親しげな友だつた。藝術にのみ彼等は心を打ち明ける事が出来た。そのやうな胸を壓する美が、他の何處にあり得よう。咏歎の響が何處にも行渡つてゐる。

支那の藝術は意志の藝術であり、日本のそれは情趣の藝術であつた。併しこの間に立つてひとり悲哀の命數を負はねばならなかつたのは朝鮮の藝術であつた。

併し人々はそれをか弱い者の美であると卑しめてはならぬ。若しもあのシェレ一の有名な句が眞であるならば、その美

シェレ一
英國の詩人
(1792—1822)

は美の極みである。「最も悲しい想を歌つたものが、最も美しい詩歌だ」と彼はいつたではないか。不安は寂寞の心を誘ひ、寂寞は憧憬の心に導く。求める者は地に充たされるのではなくして、天に於て待たれてゐる。悲しむ者は慰められるといふ。悲哀とは神の心に守られる悲哀であらう。神は慰める事を忘れはしない。悲しむ者に彼の心は引かれてゐる。悲しみが何故美を形作るか。又悲しみの美が何故かくも人を引きつけるのであるか。それは神に思はれてゐる悲しみなるが故であらうか。力ある者は自己に活き、樂しき者は自然に活きる。併し悲しむ者は神に活きる。藝術の美が悲哀の美に於て冴えるのは、それが見知らぬ神の無限な温味に守られてゐるからである。

(朝鮮とその藝術)

木下 奎太郎

本名は太田正雄

醫學博士

東北帝國大學

教授

明治十八年生

玄奘

唐代の僧侶

皇紀一三二四年

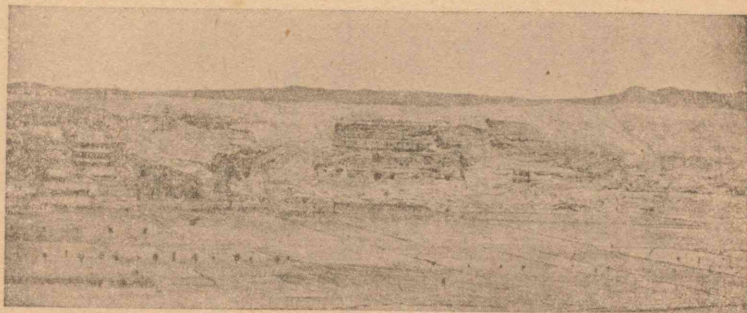
年寂

一 大同石佛寺

木下 奎太郎

石佛寺は情趣に充ちた風景に取巻かれてゐました。素焼の陶のやうな色の高い崖が長く東西に延長して、その南面に無数の洞窟が鑿られてゐます。我々は騎行しながら、一大窟中に大きな塔の立つてゐるのや、入口の穹窿に彫物の見えるのやを側に見ましたが、それが馬鹿に暗示的に感じられました。誇張していへば、昔の玄奘が中央亞細亞の廢墟に達した時の氣分にも似通ふこととせう。

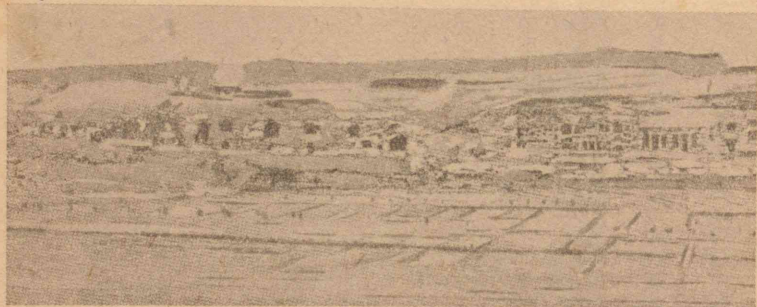
丘陵は六百歩の間、その南面が殆ど直線的に斷崖をなし、そしてそこにかの石佛寺の建物を中心として、第一第二窟以下及び東方の諸窟が並列してゐるのです。西の一端に到り、山



大同石佛寺全景

陵は俄に南方に曲ります。
馬車は石佛古寺の大門を避けて、その側の門から入りました。片隅に驢馬小屋の立つてゐる廣い空地に馬車驢馬を停めて、馬夫は中の荷を古寺の中へ運びました。古寺は二基の相接した四層樓より成り、兩者の間には互に聯絡がありました。

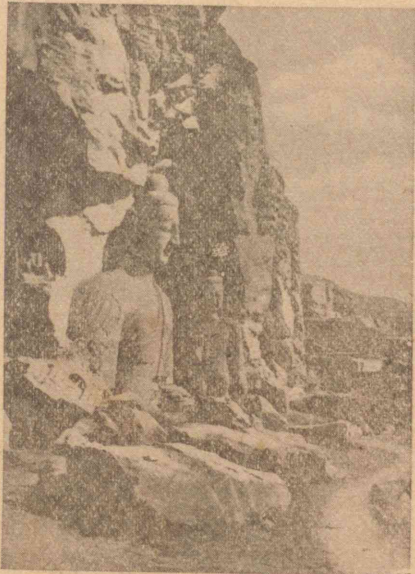
我々は何より先にづか／＼とこれ等の洞窟に跳り入りました。そしてその第一印象は頗る不定ないら／＼したものでした。失望のやうな感じ……それ



(石 同)

がその時の主調でした。「幾年間、夢寐の間にも空想してゐたものはこれなのか。」まるで田舎の祭典の山車に見る粗末な木彫の欄間と同じやうな彫物が並んでゐて、その上には、古くはないが、紅緑のてこでこの色彩が施してあります。
併し尙見て行くうちに「はてな」と考へ出しました。これ等の一見醜劣なる外觀のうち、何物かが隠れてゐることが段々と明らかになつて來ました。ちやうど夏天の外光から暗い洞窟のうちに入つて、眼が段々慣れるに従つて、初は朦

驕であつた内部の事象が、段々と明視されて来るやうに……
午餐後は山の西面に出て、その崖を登つて見、それから段々に南面に復歸して、遂に彼の有名なすばらしい露天の大佛の前に出ました。



佛大の天露

各窟を廻ると、第五窟以下には第一第二窟にも過ぎた劣悪な重修が施されており、殊に第五窟の民國九年の修理を受けたものは最も著しく、そこには寧ろ恥辱とすべき重修碑が立つてゐました。併し、殆ど修理の迹を絶した第四窟の穹窿及びその内部に

民國九年
大正九年

比較的完全に残る立像に到つては、我々が豫想した以上の大美術品で、單にこの一窟を見る爲のみでも、北京から遙々やつて来る價值があると思ひました。

第九窟と次の第十窟との間に丘陵が途切れて、なだらかな傾斜地となつてゐます。この九窟までは高い土墻で囲まれてをり、その圍のうちには、平地に數種の禾本科植物、よもぎやまはたぎをうまごやしながははぎいぬほづききらんさうあかざしをん屬の雜草及び枸杞等が繁茂して、四五匹の白馬が放ち飼になつてゐます。これは石窟の中までも闖入して、千五百年の古佛の前に馬糞の供物をするものです。

また第十窟以西は民家の墻壁内に取圍まれてゐて、民家侵入を敢てしない限りは、それに近づくことが出来ません。第

雲崗

支那山西省大
同の西方約一
一軒

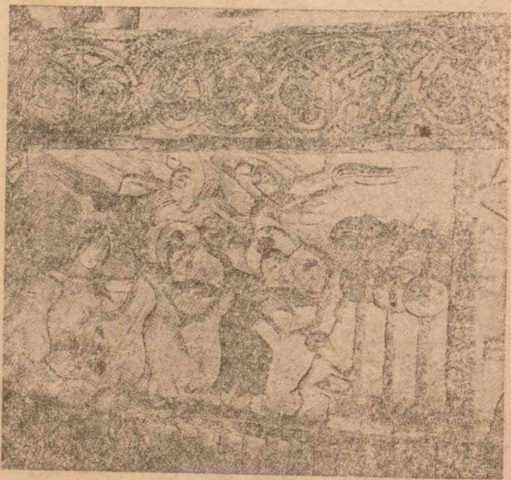
九窟で第一の斷崖が終り、それより約四十歩の傾斜地を離れて第十窟が始ります。これ等は或は人家の後壁となり、或は穀倉となり、或は粉挽小屋となり、或は厨房となつてゐます。この群は、佛像の破損は著しいが、その代り劣等な修理を免れて、その中の完體には往々燦々たる金剛顆が雜つてゐます。それを見て廻る我々は段々に興奮して來て、始めて何故に我が雲崗まで來たかといふわけを體味しました。

これ等西方諸窟は、その全長百數歩に互つて南面し、多少の彎曲を伴ひつゝ、略一直線をなしてゐます。

一つ一つの細目に就いては今夜はもう書く暇がありません。第十窟の如きは、藁を高く積上げた間から、二尺四方ばかりの石柱が出て、それに碁盤目のやうに、小佛を刻んだものな

どがありました。またその先には、三四の宏莊な石窟があり、その一つ一つに巨大な三尊佛が立つてゐました。かの露天の大佛より以西にも、窟は段々少くなくなります。すてきな彫刻品が無數に散在してゐます。

これ等の觀察の間に三四の猛犬が集つて來て、牙を剥いて吠立っています。これ等の犬は、現在我々の意識してゐる最も實力のある強敵で、明日はどうしてこれを防がうかといふ考が、今も我々の意識の手近い所に流動してゐます。



第二窟内陣

私が歩武を以てこの附近の地形を測量してゐる間に、秋天の薄暮が既に目の前まで押寄せて來ました。私は崖の上に登つて山頭に達しましたが、そこには更に高い土壁が立つてゐて、黄色の土壤には、馬鈴薯と粟とが作つてありました。

この丘陵に對して、遙か南方に、またこれと平行に走る丘陵があります。この間の帶形の平地は、武周川の流域で、川の北側には、刈残された高粱の株と菜とが黄緑の縞を造つてゐます。楊樹と村落と寺樓と廟とが、その間に散布されてゐます。こゝに二千年の石窟が痛ましい流轉の迹を残し、しかもなほ夢の如く美しい古代文化の輝きを止めてゐる時に、その壁を壁とし、その柱を柱として、數百の農民が衣食してゐるので、その對照は全くロマンチックで、且痛々しいほど可憐です。

向かひの丘陵の頂には、尙髮髯として緑の色が見えます。高粱の實を打つてゐた人々は、もはや殆ど野にその影を絶ちました。

實に平和で閑寂な地方です。單に抒情的風景を味はふだけの目的でも、こゝへ來る價值があると思ひました。

我々が寺の廂房のうちへ歸つて來た時は、室内は既に暗黒で、その廣い堂の片隅には、長方形の卓の上に、我々を案内した支那少年が假睡してゐました。少年を起して蠟燭を買ひにやり、我々は少時暗黒のうちに坐しました。先づ起るものは激しい憤怒に似た感情でした。殆ど見るに堪へぬ重修が冒瀆を極めてゐたのですから、殊に原物のすばらしい價值を見れば見るだけ、この感じは猛烈でした。

(大同石佛寺)

岡倉覺三

號は天心

畫家

元東京美術學

校長

大正二年歿

一一花

岡倉覺三

喜びにも悲しみにも、花は我々の不斷の友である。花と共に
 飲み、共に食ひ、共に歌ひ、共に踊り、共に戯れる。花を以て禮
 拜し、花を以て冥想に入り、花をつけて突撃する。花なくして
 どうして生きて行かれよう。花を奪はれた世界は考へて見
 ても恐しい。病める人の枕邊に慰安を齎し、疲れた人々の闇
 の世界に喜悅の光を齎すものは花ではないか。愛らしい子
 供に見とれてゐると失はれた希望が思ひ起されて來るやう
 に、明るく澄んだなごやかな花を眺めてゐると、宇宙に對する
 信賴の念が蘇つて來る。我々が土に葬られる時、我々の墓邊
 を、悲しみに沈んで低徊してくるものも花である。

併し、悲しいかな、我々は花を不斷の友としながらも、未だ禽
 獸の域を脱することあまり遠くないといふ事實を掩ふこと
 は出來ぬ。我々は教養や風流に名を假りて、何といふ殘忍非
 道を行つてゐることであらう。



天心先生

星の涙の滴の
 天 やさしい花よ、園
 心に立つて、日の光
 や露の玉を讃へ
 て歌ふ蜜蜂に會

釋してうなづいてゐる花よ、お前たちは、お前たちを待構へて
 ゐる恐しい運命を承知してゐるか。夏のそよ風に揺られて
 さうして居られる間は、いつまでも夢見心地で暮すがよい。

明日にも無慈悲な手がお前の咽喉を取巻くだらう。お前は振取られ引裂かれて、お前の静かな家から連れて行かれるだらう。その浅ましめは絶世の美人であるかも知れぬ。そして、お前の血でその女の指がまだ潤つてゐる間は、まあなんて美しい花だこと。といふかも知れぬ。だが、これが親切といふものだらうか。

花よ、若し日本の國にゐるならば、鋏と小鋸に身を固めた恐しい人について逢ふかも知れぬ。その人は自ら「生花の宗匠」と稱してゐるのみならず、お前たちを剪つて、屈め歪めて、自分勝手な考でお前たちの姿勢を途方もなく變なものにしてしまふだらう。その上、揉療治をする者のやうに、お前たちの筋肉を曲げたり骨を違はせたりするだらう。又、出血を止める爲

に灼熱した炭でお前たちを焦したり、循環を助ける爲に身體の中へ針金をさし込んだりするだらう。鹽・酢・明礬・時には硫酸を食物として與へ、お前たちが今にも氣絶しさうな時に煮湯を足に注ぐこともあるだらう。そしてお前たちが治療を受けない場合に比べて、二週間以上も長く生命を保たせておくことが出来るのを誇とするだらう。かくて彼は醫者の權利をさへ要求する。

西洋の社會に於て花を無駄にすることは東洋の宗匠の花の扱ひ方よりも更に甚だしいものがある。舞踏室や宴會の席を飾る爲に日々剪取られ、翌日は投捨てられる花の數はなかなか莫大なものに違ない。一つに繋いだら一大陸を花輪で飾ることも出来よう。このやうに、命そのものを全くもの

とも思はぬことに比べれば、花の宗匠の罪はまだしも軽い。彼は少くとも自然の經濟を重んじ、深い慮を以てその犠牲者を選び、死後はその遺骸に敬意を表する。

花を栽培する人の爲には更に一層肩を持つてやつてもよい。植木鉢をいぢる人は花鉢を振廻す人よりも遙かに人情がある。彼は水や日光について心配したり、寄生蟲を相手に争つたり、霜を恐れたり、芽の出やうが遅いといつて氣を揉んだり、葉に光澤が出て來たといつて有頂天になつたりする。

併し、鉢植の花の場合でさへ、人間の勝手氣儘が感じられる。何故に花をその故里から連出して、知らぬ他郷に咲かせようとするか。それは小鳥を籠に閉ぢこめて歌はせようとするのと同じではないか。蘭類が温室で人工の熱によつて息づ

まる思をしながらなつかしい南國の空を一目見たいと空しくあがいてゐると誰が知らう。

花を理想的に愛する人は、破れた籬の前に坐して野菊と語つた陶淵明や、黄昏に西湖の梅花の間を逍遙しながら、暗香浮動の趣に我を忘れた林和靖の如く、花の生まれ故郷に花を訪ねる人々である。周茂叔は彼の夢が蓮の花の夢と混ざるやうに、舟中に眠つたと傳へられてゐる。

併し、餘りに感傷的になるのはやめよう。奢ることを一層戒めて、もつと壯大な氣持にならうではないか。花をちぎることによつて、新な形を生み出して人の心を高めることが出来るならば、さうしてもよいではないか。我々が花に求める所はたゞ美に對する奉納を共にせんことにある。我々は純

陶淵明
名は潛
晉代の文人
皇紀一〇八七
年歿
西湖
支那浙江省に
ある
林和靖
名は通
宋代の文人
皇紀一六八八
年歿
周茂叔
名は敦頤
宋代の學者
皇紀一七三三
年歿

潔と清楚とに身を捧げることによつて、その罪滅しをしよう。かういふ論法で、茶人達は生花の法を定めたのである。

我が茶や花の宗匠の遺口を知つてゐる人は、彼等が宗教的の尊敬をもつて花を見ることに氣がついたに違ない。彼等は一枝一條も濫りに剪取することをせず、己が心に描く美的配合を目的に注意深く選擇する。彼等は、若し、絶対に必要の度を越えて萬一剪取るやうなことがあると、これを恥とした。彼等はいつても、多少でも葉があれば必ず花に添へて生けておく。彼等の目的は花の生活の全美を表すにあるのだから。

茶の宗匠は心ゆくやうに花を生けると、床の間に据ゑる。

そして、その効果を妨げるものは一切その近くにはおかない。一幅の畫と雖も、その配合に何か特殊の審美的理由がなければ

石州

片桐石見守貞

昌

大和國小泉藩

主 石州流茶

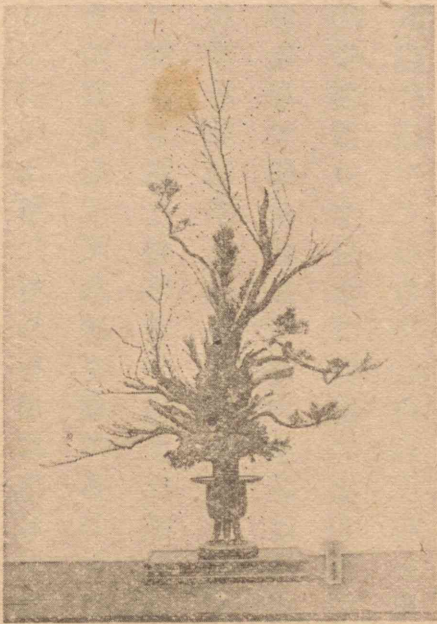
道の祖

二二三三年歿

ばならぬ。花はそこに王位についた王子のやうに坐つてゐる。そして客や弟子たちは、その室に入るや先づこれに丁寧な御辭儀をしてから、始めて主人に挨拶をする。花が色褪せると宗匠は懇にそれを川に流し、又は丁寧に地中に埋める。その靈を弔うて墓碑を建てることさへもある。

併し、茶人たちの花の尊崇は、唯彼等の審美的儀式の一部をなしたに過ぎないのであつて、それだけが獨立して、別の儀式をなしてはゐなかつた。生花は茶室にある他の美術品と同様に、裝飾の全配合に従屬的なものであつた。故に石州は雪が庭に積んでゐる時は、白い梅花を用ひてはならぬと規定した。騒々しい花は茶室から遠ざけられた。茶人の生けた生花は、その本來の目的の場所から取去れば、その趣旨を失ふも

のである。といふのは、その線や釣合は特にその周囲のものとの配合を考へて工夫されてゐるのだから。



花を花そのものの爲に崇拜することは、十七世紀の中葉花の宗匠が出るに及んで始つた。今や花は茶室と獨立に唯花瓶が課する法則の他には全く束縛を受けなくなつた。新しい考案、新しい方法が可能になつて、多くの法則や流派が起つた。十九世紀には、百以上の異なつた生花の流派を擧げることが出来た。廣くいへば

狩野派
狩野正信を祖とする畫派

探雪

畫家
狩野探雪

二二三三四年歿

常信

畫家
狩野常信

二二七三三年歿

浮世繪

江戸時代初期に起つた風俗畫

四條派

松村吳春を祖とする畫派



茶室に飾られたり投入

これ等諸流は、形式派と寫實派の二大流派に分けられる。形式派は、狩野派に相當する古典的理想主義をねらつて、探雪や常信の花の畫を殆どその儘にうつし出した。一方寫實派はその名の示す如く、自然をモデルとして、唯美的調和を表現する助となるやうに形に修正を加へたに過ぎないので、この派の作には浮世繪や四條派の畫と同じ氣分が認められる。併し、私は花の宗匠の生花よりも茶人の生花の方に共鳴を感じる。茶人の花は、適當な場所におくと藝術になつて、人生

と眞に密接な關係を持つて來る。この流派を寫實派及び形式派と對稱區別して、自然派と呼びたい。茶人たちは花を選擇すること彼等の爲すべきことは終つたと考へて、その他のことは花自らの身の上話に任せた。晩冬の頃茶室に入れば、野櫻の小枝に蕾の椿の取合はせてあるのを見る。それは去らんとする冬の名残と來らんとする春の豫告とを配合したものである。又、いらくするやうな暑い夏の日に晝のお茶に行つて見れば、床の間の薄暗い涼しい所にかゝつてゐる花瓶には、一輪の百合を見る。

花の獨奏は面白いものであるが、繪畫彫刻との合奏となれば、その取合はせには人を恍惚たらしめるものがある。石州は嘗て、湖沼の草木を思はせるやうに水盤に水草を生けて、上

相阿彌

名は眞相

畫家 茶人

二二八五年歿

紹巴

里村紹巴

連歌師 茶人

二二六〇年歿

利休

千利休

名は宗易

茶人

二二五一年歿

の壁には相阿彌の描いた空飛ぶ鴨の繪をかけた。紹巴は海邊の漁家と野花の形をした青銅の香爐に配するに、海岸の淋しい美しさを歌つた和歌を以てした。その客人の一人は、その全配合の中に晩秋の微風を感じたと記してゐる。

花物語は盡きないが、もう一つだけ語ることにしよう。桃山時代には朝顔はまだ珍しかつた。利休は庭全體にそれを植ゑさせて丹精こめて栽培した。利休の朝顔の名が太閤の耳に達すると、太閤はそれを見たいと所望した。そこで利休は我が家の朝の茶の湯へ招待した。その日になつて太閤は庭中を歩いて見たが、朝顔は跡形さへもなく、地面は平かて美しい小石や砂が敷かれてゐた。太閤はむつとした様子で茶室へはいつた。併しそこには見事なものが待つてゐて、彼の

機嫌はすつかりなほつてしまつた。床の間には、宋細工の珍しい青銅の器に、全庭園の女王である一輪の朝顔が生けられてゐたのである。

かういふ例を見ると、花御供の意味がよく分かる。多分花も十分にその意味を了解してゐるであらう。彼等は卑怯者ではない。花によつては死を誇とするものもある。櫻花の如きは、風に身を任せて片々と散る時、これを誇とするものであらう。吉野や嵐山の薫る雪崩の前に立つたことのある人は、誰でもきつとさう感じるであらう。寶石をちりばめた雲の如く飛ぶことしばし、又水晶の流の上に舞ひ、落ちてはさめく波の上に身を浮かべて、いざさらば春よ、我等は永遠の旅に行く。といふやうである。

(茶の本)

嵐山
京都市右京區
にある櫻・紅
葉の名所

柳田國男
傳説研究家
明治六年生

一三 爐の火

柳田 國男

火の最も原始的なる魅力は、炎であり、光であつた。子供などは何の用もない場合にも、物を燃やして突如として咲く花のあでやかさを賞翫しようとした。暗黒の不安を追拂ふ爲には、跳ねてばち／＼と音を立てるやうな、豆がら馬酔木の類をまじへて焚く必要さへ認められた。

必ずしも巖窟の穴の奥に隠れた大昔に限らず、家を建て、簾を垂れて住始めてからずつと後まで、窓は出来るだけ高く小さく、戸を閉ぢ、壁を塞いで、雨であれ、風であれ、あらゆる外から来るものを總括して、畏れ且防衛してゐた世の中に於ては、爐の火はまことにたゞ一つの家の中の光明であつた。

月は漏れ
月は漏れ雨は
たまれと思ふ
にはしづがふ
せやを葺きぞ
わつらふ
(撰集抄)

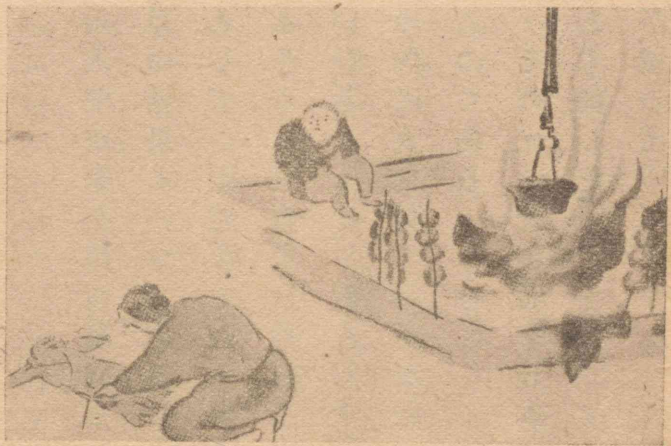
月は漏れ、雨は漏るなど古歌にもある通り、耀く青空の光ばかりを内に迎へ入れる方法は、以前にはなかつたのである。それが今日のやうに、どの室も明るく、最早爐の火に炎と光明とを仰ぐことを必要とせぬまでになつたのは、單なる人間の智慮、分別といはんよりも、寧ろ具體的に、紙の力、明障子の功勞といつた方が當つてゐる。

その後、紙は追々に硝子に取つて代られ、終には日中の電燈とまで進んで来て、人は如何なる地下室の底でも働き得るやうになつたのであるが、それは必ずしも結構なことのみでないかも知れぬ。たゞ、少くとも數千年來の火の光を斷念し、嘗ては荒神様とまで尊信畏服してゐたものを、今日の如く自由自在に制御するやうになつたのは、何といつても新なる事

業であり、又自給ある勇氣の獲物であつた。

人間が家を持ち、家族といふものを引纏め得たのは、火の發見の結果といつてよろしい。光と溫度と食物との一大中心としての圍爐裏といふものが若しなかつたならば、到底今見るやうな家庭及び社會は出來上らなかつたらう。民の竈といひ、若しくは、戸數を何十何煙といつて數へたのも、實は一家の内に火を焚く場所が、たゞ一つしかなかつたことを意味するのである。

その光の管理者を、日本では「あるじ」と名づけ、後には旦那殿とも稱した。さうして、その管理權の所在を具體化したものが、爐の横座であつた。横座とはいつても、それは正面の席で



火の爐

あつて、事實はその左右の敷物が何れも縦に連なつてゐるのに對して、家長の座だけは横疊に敷いてある故に、さういふ名前が古くから生じてゐたのである。

通例は、向かつて爐の右手、即ち横座から左になる一側を、茶飲座、腰元又は勝手などとも呼んでゐる。その最も横座に接近した席は、當然に主婦に專屬した。「へら」即ち飯匙はその權力の象徴であり、食物の分配は

たゞ「へら」即ち「おかた殿」のみの掌る所であつた。

茶飲座と相對する他の一側が客座である。こゝにも席次があつて、最も款待せらるべき者が、一番横座の右近くに坐つた。それから、残りの今一側の爐端が、下座、下郎座又は木尻である。「嫁は木尻筋から貫へ」といふ諺などもあつて、一段と身分の低い者の座席である。本來は薪の尻をその方へ向けて置く故の名であつた。煙いのを我慢すべき、居心地のよくない座であつた。

さてこれほどまでに秩序を正して、家には一つしか火の中心を作らぬやうに努めたのであるが、人の心の變化は是非ないもので、終に室毎に炬燵を置かねばならぬ時代が來た。最

初は年寄などの安住處としたものが、後には息子までが新聞や本を抱へて、自ら獨立を宣するやうになつた。それを後援したのは紙と硝子の障子、次にはランプ・電燈などであつた。

この炬燵は、火の神の信仰に對して、明白に一つの叛逆であつた。正月松の内に圍爐裏に足を入れると、苗代に鷺が附くなどといつて叱られてゐたのに、炬燵では何の遠慮もなく、足を出してあつてゐる。併し、猶知らぬ間に以前からの約束を踏襲して、火の清濁セイヤウの差別待遇を承認し、この火は食物の煮焼きなどには供用せぬことになつてゐた。炬燵の中で手を叩くことを、老人などの非常にいやがる土地が今でもあつて、それを何故かと尋ねて見ても、もう説明し得る者は一人も無いのであるが、手を叩くといふのは、恐らく荒神様の禮拜を意

味し、火の淨からぬ炬燵の中では、その行爲をさへ嚴戒してゐたのではないかと思ふ。

ニューギニー
大洋洲に屬す
る太平洋中の
大島

火を焚けば話がはずむといふ原因結果は、よほど久しい大昔からの、不思議な法則であつたらしい。先年和蘭のローレンス博士の一行が、二度目のニューギニー雪山の探検を企てた時には、色々考へた末に、ボルネオ内地の土人を人夫に連れて行つた。勇敢で、従順で、正直なことは申分なかつたが、たゞ一つの缺點は、野營地で焚火をさせると、火のある間は話をしてゐてどうしても睡らないから、日中に居眠をして困ることであつた。赤道直下の島に生まれた彼等には、通例は火の必要はない筈であるが、一たび高山に登つて、篝火の夜の光に接す

ると、忽ちにして悠遠なる祖先の、感覺が目ざめるのか、特殊の興奮に誘はれずにはゐられなかつたのである。

日本に於ても、昔話は冬のものであり、且夜分にするものと、きまつてゐたのは、本來は必ず圍爐裏に火を燃やす時の儀式であつた爲かと思ふ。即ち、横座の主は、家の火の管理者であると同時に、更に先天的に夜話の議長であり、且傳統教育の學校長でもあつたかと思ふのである。そして、この傳統教育は、今日の人の思ふよりはるかに有力な人間教育であつたらうとも思はれるのである。

(雪國の春)

下田次郎

教育家
文學博士
昭和十三年歿

一四 味はひある生活

下田次郎

物には味といふものがある。砂糖は初からスル甘いし、スル鯛は嚙んでゐるうちに味が出て来る。どちらもその物がもつた味であるが、その外附味といふものもある。

きなこ餅や田樂豆腐などはそれである。本人に取りえのある人は砂糖か鯛の如く、著物や紅白粉で外から味をつけた人はきなこ餅や田樂豆腐の類であらう。

生活でもやはりそのやうなもので、本當に味はひのある生活と、一向見かけ倒しの、實質的には何らの味はひのない生活がある。或高原に避暑に行つてゐる婦人が、夫の車の後押をして行く妻を見て羨んだといふことを聞いたが、年中するこ

ともなく、美服を著て人形のやうにしてゐたのでは、さぞつまらないことであらう。頭の空虚な者は、交換すべき思想がないから、カルタを交換するといつた人があるが、カルタやトランプを交換する外、することのない人間は氣の毒なものである。

中には交際が生活だと思つて、頻りに交際してゐる人があつて、かゝる人は、結婚の披露に呼ばれたり、葬式に行つたり、出産の喜びに行つたりすることが、生活の重大事件だと思つてゐる。これは多くは形式的、表面的の生活で、自分の生活の實質に關係あるものではない。かゝる人たちの生活から儀式を除いたらば、何が残るか。繪の貴ばれるのは、その繪が傑作であるからであつて、額縁が立派だからではない。世には中

味の繪を忘れて額縁が立派だと思つてゐる人もある。

富み足る生活は、貧乏と缺乏の生活よりは好ましいものであらう。併し、それも人によるので、何をするといふ目的もなく、學問能力もなく、徒に富み足つた生活は退屈である。停車場で一時間汽車を待つ退屈さから推して、一生汽車を待つ退屈さが續いたならばどんなに苦しいことであらう。シヨーパーンハウエルは、退屈ほど堪へられないものはない。そしてその眞の源は、心の空虚にあるといつた。かゝる退屈の生涯こそは、眞に悲惨なものである。

かゝる生活は欠伸の連發か、儀式社交の出入かである。その結果は頸骨の發達、又は世辭の巧妙であつて、眞の生活と何らの交渉なきものである。「若き時學ばぬ悔をかみしむる奥

シヨーパーン
ハウエル
十九世紀中葉
のドイツの哲
學者

貝原益軒

名は篤信

儒者

二二七四年歿

平田篤胤

國學者

二五〇三年歿

汝自らを知れ
(ギリシャの
古謎)

齒なきまで身は老いにけり」はまだいゝが、若い時分からこれでは、何のための生活か分からない。内容の空虚な人の交際ほど慰懃を極めたものはない。それより外に何物もないからである。「つれづれ」といとまあるまゝに訪來りて長居するわびし」と貝原益軒は困り、世俗無用の長談御用捨可被下候」と平田篤胤は斷つた。併し、それより外、暮しのつかぬ人のあるのは氣の毒である。その反對に、いくら聽いてゐても飽かない、きり上げられるのが惜しいやうな話をする人もある。それは學殖や趣味のある人の話である。そんな人になりたいものである。「生きる」といふことは、世界における最も希有なものである。古人は「汝自らを知れ」といつたが、それより大切なのは「汝自らであれ」といふことである。併し多くの人間は、

オスカー・ワ
イルド
十九世紀後半
のイギリスの
文學者

たゞそこにゐるといふだけである。人が物質的に何をもつてゐるかは大した問題ではない。大切なのは、その人が何であるかである。人は己の有する特徴を發揮し、自己として最も價値ある生活を營むべきである。とのオスカー・ワイルドの意見には、少しく生活といふことに就いて考へる者は、共鳴せざるを得ないであらう。

外からつけたもので生きてゐる人は、それが何であらうとも、大した人間ではない。寶石の指環を、花火の筒のやうに指にはめた婦人は、貴婦人といふよりは貴金屬の方だ。婦人はダンスと箏箏が好きだといふが、著物と踊が生活の内容なら、美装した猿だつてそのくらの生活はする。貧乏で苦しい生活にも生活の味はひがある。否、人間の靈性が光を放ち、そ

ミレー
十九世紀中葉
のフランスの
畫家

の最善が發揮されるのは、富足と安逸の生活よりも、むしろ貧乏と苦痛の生活においてである。畫家ミレーはいかに貧乏を材料として、その生活と繪畫とを作り上げたか。傑作は必ずしも作物にのみあるのではない。生活そのものにも傑作はあるのである。ミレーに繪畫がなくても、その作品以上に、その生活が傑作であつたのである。凡人として、生活の傑作は望めないとしても、生きがひのある、味はひのある生活はしたいものである。それはたゞ交際や、儀式や、買物や、ダンスや、著物の見せあひの生活ではなくて、奮闘の生活であり、努力の生活であり、汗の生活であり、血のにじむ生活でなければならぬ。緊張もなく、感激もない、氣の抜けたサイダーのやうな生活、水にふやけたパンのやうな生活に、何の味はひがあらうぞ。

「立てる農夫は坐せる紳士に優る」といふ語があるが、同じことが婦人に就いてもいへるであらう。遊んで暮してゐるのが見えの時代は過去つた。何か意義あることをして、生活の内容を充實しなくてはならぬ。商店の飾窓の人形のやうな生活は、いかに美しくてもだめである。あらゆる附加物を取去つて、正味の自分が何であるかを考へてみよう。豊富な學問、優秀な技能、貴重な經驗、洗煉された趣味、微妙な感情、暖かい同情、燃える意氣、不撓の努力、それ等が縦絲横絲となつて織りなされた生活こそは、眞に錦繡の生活であつて、最も生きがひあるものに違ない。

(婦人と希望)

良寛

俗名山本文孝

歌僧

二四九一年寂

一五 佐渡が島

良

寛

佐渡が島の山は霞のまゆ引きて夕日まばゆき
 春のうなばら
 鉢の子にすみれたんぼゝこきまぜて三世の佛
 に奉りてむ
 霞立つ長き春日にうぐひすの鳴く聲きけば心
 はなぎぬ
 歌やよまむ手鞠やつかむ野にや出でむ心一つ
 を定めかねつゝ
 里べには笛や太鼓の音すなりみ山はさはに松
 の音しつ

月よみの光を待ちて歸りませ山路は栗のいが
 の多きに
 いざうたへわれたち舞はむぬば玉の今宵の月
 にいねらるべしや
 風はきよし月はさやけしいざ共にをどりあか
 さむ老のなごりに
 よひやみに道やまどへるさを鹿のこの岡をし
 も過ぎがてに鳴く
 我も思ふ君もしかいふこの庭に立てる槻の木
 いと古りにけり
 たらちねの母がかたみと朝夕の佐渡の島べを
 うち見つるかも

近江の湖

琵琶湖

梁塵秘抄

二十卷

平安末期にな

つた歌謡集

後白河法皇の

御撰

一六 近江の湖

(梁塵秘抄)

舞へくかたつぶり 舞はぬものならば 馬
の子や牛の子に蹴ゑさせてむ 踏破らせてむ
まことにうつくしく舞つたらば 華の園まで
遊ばせん

松の木かげに立寄りて 岩もる水をむすぶま
に 扇の風も忘られて 夏なきとしとぞ思ひ
ぬる

近江の湖はうみならず 天台薬師の池ぞかし

なぞのうみ 常樂我淨の風吹けば 七寶蓮華
の波ぞ立つ

佛は常にいませども 現ならぬぞあはれなる
人の音せぬ曉に ほのかに夢に見え給ふ

曉靜かに寢覺めして 思へば涙ぞ抑へあへぬ
はかなくこの世を過ぐしても いつかは淨土
へまゐるべき

一七 幻住庵の記

松尾芭蕉

石山
現大津市の内
國分山
石山町國分

何某
膳所藩士本多
八左衛門
菅沼氏曲翠子
芭蕉の門人
二三八〇年歿

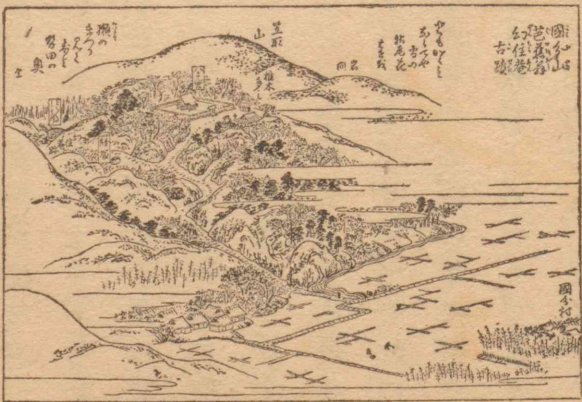
石山の奥岩間のうしろに山あり。國分山といふ。そのか
みの國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠
微に登ること三曲二百歩にして、八幡宮立たせ給ふ。神體は
彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部
光を和らげ、利益の塵を同じうし給ふもまた貴し。日頃は人
の詣でざりければ、いとど神さび物しづかなる傍に、住捨てし
草の戸あり。蓬根笹軒をかこみ、屋根漏り壁落ちて、狐狸臥處
を得たり。幻住庵といふ。あるじの僧何某は勇士菅沼氏、曲
翠子の伯父になん侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に
幻住老人の名をのみ残せり。

五十年や、近
き身

芭蕉四十七歳

象潟
秋田縣象潟町
の東北の入江

予また市中を去ること十年ばかりにして、五十年や、近き
身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を
離れて、奥羽象潟の暑き日に面を
焦し、高砂子歩み苦しき北海の荒
磯に踵を破りて、今年湖水の波に
漂ふ鳩の浮巢の流れ留るべき蘆
の一本の蔭たのもしく、軒端葺改
め、垣根結ひそへなどして、卯月の
初、いとかりそめに、入りし山の、や
がて出て、じとさへ思ひそみぬ。
さすがに春の名残も遠からず、
躑躅咲きのこり、山藤松にかゝりて、時鳥しばく、過ぐるほど、



跡庵住幻

吳楚東南に走
り
(杜甫)
 瀟湘・洞庭
(山谷集)
 笠取
 笠取山
 京都府宇治郡
 笠取村
 三上山
 滋賀縣野洲郡
 土峯
 富士山
 田上山
 滋賀縣栗太郡
 古人
 猿丸大夫
 歌人
 とくくの雫
 とくくのと落
 つる岩間の苔
 清水汲みほす
 ほどもなきす
 まひかな
 (傳西行)

宿かし鳥の便りさへあるを、啄木鳥のつゝくとも厭はじなど、
 そゞろに興じて、魂は吳楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。
 山未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薰峯よりおろし、北
 風海を浸して涼し。比叡山・比良の高嶺より、辛崎の松は霞こ
 めて、城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓
 の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞のたゝく音、
 美景物として足らずといふことなし。中にも三上山は土峯
 のおもかげに通ひて、武藏野の古き住家も思ひ出でられ、田上
 山に古人をかぞふ。なほ眺望隈なからんと、後の峯に這上り、
 松の棚つくり、藁の圓座を敷きて、猿の腰掛と名づく。たまた
 ま心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくくの
 雫をわびて、一爐の備いと輕し。

筑紫高良山
 福岡縣三井郡
 甲斐何某
 藤木甲斐守敦
 直
 賀茂神社神職
 書家
 二二〇九年歿
 越前・越中
 越後



はた昔住みけん人の、殊に心高く住みなし侍りて、巧み置け
 る物ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜
 の物を納むべき處などいさゝかしつら
 へり。さるを、筑紫高良山の僧正は、賀茂
 住の甲斐何某が嚴子にて、このたび洛に上
 庵りいまそかりけるを、或人をして額を乞
 のふ。いとやすくと筆を染めて、幻住庵
 の三字を送らる。やがて草庵のかたみ
 となしぬ。すべて、山居といひ、旅寝とい
 ひ、さる器蓄ふべくもなし。木曾の檜笠、
 越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれくとぶ
 らふ人々に心を動かし、或は宮守の翁、里ののをのこども入來り

て、猪の稻食荒し、兎の豆畑に通ふなど、我が聞知らぬ農談に、日
已に山の端に懸れば、夜坐靜かに月を待ちては影を伴なひ、燈
を取りては罔兩に是非を凝らす。

かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隠さん
とにはあらず。や、病身、人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。
つら／＼年月の移り來し拙き身の科を思ふに、或時は仕官懸
命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよ
りなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計
とさへなれば、終に無能無才にしてこの一筋につながる。樂
天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとし
からざるも、何れか幻のすみかならずやと思ひ捨てて臥しぬ。
先づたのむ椎の木もあり夏木立

(猿蓑集)

樂天

白居易

唐代の詩人

皇紀一五〇七

年歿

老杜

杜甫

唐代の詩人

皇紀一四三〇

年歿

源信僧都

俗姓は卜部

天台宗の高僧

一六七七年歿

今昔物語

三十一卷

平安末期に成

つた説話集

傳源隆國作

横川

比叡山三塔の

一

大和國葛下郡

現奈良縣北葛

城郡

三條の太後の

宮

冷泉天皇の皇

后

一六五九年崩

御

一八 源信僧都の母

(今昔物語)

今は昔横川の源信僧都は大和國葛下郡の人なり。幼くし
て比叡の山に登り、學問してやむごとなき學生がくしやうになりにつれ
ば、三條の太後の宮の御八講に召されにけり。

八講畢つて後、賜はりたりける捧物の物ども少し分けて、大
和國にある母の許に、かくなむ後の宮の御八講に參りて賜は
りたる。始めたる物なれば、先づ見せ奉るなり。とて遣はした
れば、母のかへりごとには、く遣はせ給へる物どもは喜びて
賜はりぬ。かくやむごとなき學生になり給へるは限りなく
喜び申す。但し、かやらの御八講に參りなどして歩き給ふは、
法師になし聞えし本意には非ず。そこにはめてたく思はる

多武峯の聖人
増賀聖人
俗姓は橋
比叡山で修行
後多武峯に隠
れた高僧
一六六三年寂

らめども、姫の心には違ひにたり。姫の思ひしことは、女子はあまたあれども、男子はそこ一人なり。それを元服をもせしめずして、比叡の山に上げたれば、學問して、身の才よくありて、多武峯の聖人の様に貴くて、姫の後世をも救ひ給へと思ひしなり。それに、かく名僧にて、花やかに歩き給はむは、本意に違ふことなり。わが年老いぬ。生きてらむ程に、聖人にして在せむを、心安く見置きて死なばやとこそ思ひしか。と書きたり。僧都これを披きて見るにも、涙を流して、泣くく、即ちまたかへりごとを遣はしていはく、源信は更に名僧せむの心なし。たゞ、尼君の生き給へるとき、かくの如くやむごとなき宮原の御八講などに参りて、聞かせ奉らむと思ふ心深くして、いそぎ申しつるに、かく仰せられたれば、極めてあはれに悲しく、嬉し

く思ひ奉る。然れば仰に従ひて山籠りを始めて、聖人になら



傳源信筆阿彌陀三尊來迎圖

む。今はあはむと仰せられむときにぞ参るべき。然らざらむ限りは、山を出づべからず。但し、母と申せども、極めたる善人にこそ在しましけれ。と書きて遣りつ。そのかへりごとには、いはく、「今なむ胸落ちゐて、冥途も安くおほゆる。返すく嬉しく思ひ聞ゆ。ゆめくお

ろそかに在すべからず」と。僧都これを見て、この二度のかへりごとを法文の中に卷置きて、とき／＼取出して見つゝぞ泣きける。

かく山に籠りて六年は過ぎぬ。七年といふ年の春、母の許にいひ遣はしていはく、六年は既に山籠りにて過ぎぬるを、久しく見奉らねば戀ひしくや思し召す。然らばあからさまに詣てむ」と。かへりごとにはく、げに戀ひしくは思ひ聞ゆれども、見えむにやは罪は滅びむずる。なほ、山籠りにて在せむを聞かむのみぞ嬉しかるべき。これより申さざらむ限りは、出て給ふべからず」と。僧都これを見て、この尼君はたゞ人にもなき人なりけり。世の人の母はかくいひてむや」と思ひて過す程に、九年になりぬ。

「告げざらむ限りは來るべからず」といひ遣はしたりしかども、怪しく心細く思ひて、母の俄に戀ひしくおぼえければ、若し尼君の失せ給ふべき刻の近くなりたるか、また、わが死ぬべきにやあらむとあはれにおぼえて、さはれ來るべからずとはたまひしかども、詣てむと思ひて、立ちてゆくに、大和國に入りて、道に男、文を持ちて逢へり。僧都、いづくへゆく人ぞ」と問へば、男のいはく、しか／＼の尼君の、横川に在する子の御房の許へ遣はす文なり」といへば、しかいふはわれなり」といひて、文を取つて、馬に乗りながらゆく／＼、披きて見れば、尼君の手にはあらで、あやしの様に書かれたり。胸塞がりて、如何なることのあるにかとおぼえて讀めば、日來何ともなく、風の發りたるかと思ひつるに、年の高きけにやあらむ、この二三日弱く

て力なくおぼゆるなり。申さざらむ限りは出て給ふべからずとは心強く聞えしかども、限りの刻になりぬれば、今一度見奉らでや止みなむずらむと思ふに、限りなく戀ひしくおぼえ給へば申すなり。疾くく、在せと書きたるを見るに、あやしく心にかくおぼえつるは、かくありければこそありけれ。親子のちぎりはあはれなることとはいひながら、佛の道にあながちに勧め入れ給ふ母なれば、かくはおぼえけるなりけりと思ひつゞくるに、涙雨の如く落ちて、弟子なる學生ども二三人ばかり具したりければ、それ等にも、かゝることのありければなりけり。といひて、馬を早めてゆきければ、日暮にぞゆき著きたりける。

急ぎ寄りて見れば、無下に弱くなりて、たのもしげもなし。

僧都、かくなむ詣て來る。と高やかにいへば、尼君、いかで疾くは在しつるぞ。今朝曉にこそ人は出し立てつれと。僧都のいはく、かく在しければにや、近來戀ひしくおぼえ給ひつれば参りつる程に、道にして使に逢ひたりつる。と。尼君これを聞きて、あな嬉し、死の刻には逢ひ給ふまじきにかとこそ思ひつるに、かく在し逢ひたること、ちぎり深くあはれにもありけるかな。と息の下にいへば、僧都のいはく、念佛は申し給ふかと。尼君、心には申さむと思へど力なきに、合はせて勸むる人のなきなり。といへば、僧都貴きことどもをいひ聞かせつゝ、念佛を勸むれば、尼君、ねむごろに道心を發して、念佛を一二百遍ばかり唱ふる程に、曉方になりて消入るやうにて失せぬ。

僧都、われ來らざらましかば尼君の臨終はかくはなからま

し。われ、親子の機縁深くして來り逢ひ、念佛を勧めて道心を發し、念佛を唱へて失せ給ひぬれば、往生は疑なし。況やわれを聖の道に勧め入れ給へる志に依りて、かく終は貴くて失せ給ふなり。然れば親は子の爲、子は親の爲に、限りなかりける善知識かな。といひてぞ、涙を流しける。その後七々の法事をたしかに修し終へて、弟子引具して横川には歸りたりけり。横川の聖人達もこれを聞きて、あはれなりける親子のちぎりなりといひてぞ、泣くく、貴びけるとなむ語り傳へたるをや。

世阿彌

本名は結崎元清
能役者 謡曲
作者
二一五年歿

一九 隅田川

世阿彌

人物

シテ

狂女梅若丸の母

ワキ

渡守

ワキヅレ

旅人(都の者)

子方

梅若丸の靈

處

隅田川岸

時

三月十五日

ワキ 「これは武藏の國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。またこの在所にさる仔細あつて、大念佛を申す事の候間、僧俗を嫌はず人數を集め候。その由皆々心得候へ。」

ワキ
次第

末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遙々の心かな。

「かやうに候者は都の者にて候。われ東に知る人の候程に、かの者を尋ねてたゞ今罷り下り候。

道行 雲霞、あと遠山に越えなして、あと遠山に越えなして、いく關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、此處ぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く著きにけり、渡りに早く著きにけり。

「急ぎ候程に、これははや隅田川の渡りにて候。また、あれを見れば舟が出て候。急ぎ乗らばやと存じ候。

「如何に船頭殿舟に乗らうずるにて候。

ワキ 「なか／＼の事、召され候へ。まづ／＼御出て候あとの、けしからず物騒に候は何事にて候ぞ。

ヅレキ

「さん候、都より女物狂の下り候が、是非もなく面白う狂

ひ候を見候よ。

ワキ 「さやうに候はば、暫く舟をとめて、かの物狂を待たうずるにて候。

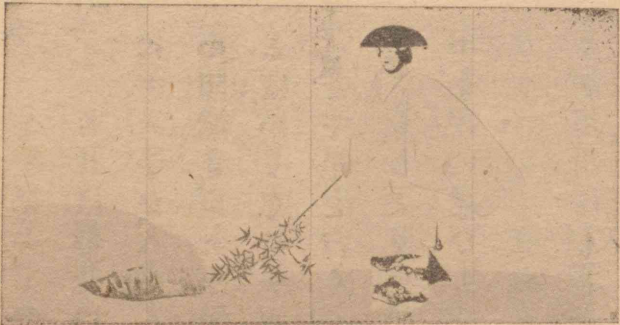
サシテ げにや人の親の心はやみにあ

らねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行き人に言傳てて、行方をなにと尋ねらん。

聞くや如何に、上の空なる風だにも、

地誌

松に音する習あり



隅 田 川

人の親の心

三七頁参照

白雪の

春くれば雁歸るなり白雪の道ゆきぶりにことやつてまし(凡河内躬恆—古今集)

聞くや如何に

聞くや如何に上の空なる風だにも松に音する習ありとは(宮内卿—新古今集)

北白河

現京都市左京

區

逢坂の關

現大津市南方

千里を

親千里ヲ行キ

テ子ヲ忘レズ

(白樂天)

四鳥の別れ

桓山ノ鳥四子

ヲ生ミ羽翼既

ニ成リテ將ニ

四海ニ分カレ

ントスル時ソ

ノ母悲鳴シテ

之ヲ送ル

(孔子家語)

シテ 眞葛が原の露の世に、

地謡 身を恨みてや、明け暮れん。

シテ これは都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外

に一人子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の關の東

の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなた

とばかり思ひ子の跡を尋ねて迷ふなり。

地下歌 千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、

上歌 もとよりも、契假なる一つ世の、契假なる一つ世の、その

中をだに添ひもせて、此處や彼處に親と子の、四鳥の別れこ

れなれや。尋ぬる心のはてやらん、武藏國と下總の中にあ

る隅田川にも著きにけり、隅田川にも著きにけり。

シテ 「なう／＼、我をも舟に乗せて賜はり候へ。

ワキ 「おことはいづくよりいづかたへ下る人ぞ。

シテ 「これは都より人を尋ねて下る者にて候。

ワキ 「都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂

はずはこの舟には乗せまじいぞとよ。

シテ 「うたてやな隅田川の渡守ならば、『日も暮れぬ、舟に乗れ』

とこそ承るべけれ。 謡かたの如くも都の者を舟に乗るな

と承るは、隅田川の渡守とも覚えぬ事を宣ひそよ。

ワキ 「げに／＼、都の人とて、名にし負ひたる優しさよ。

シテ 「なう、その詞はこなたも耳にとまるものを。 かの業平

もこの渡りにて、 謡『名にし負はばいざ言問はん都鳥、わが

思ふ人はありやなしやと』。

日も暮れぬ

渡守、「はや舟

に乗れ、日も

暮れぬ」

(伊勢物語)

業平

在原業平

歌人

一五四〇年歿

名にし負はば

(伊勢物語)

「なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。

ワキ 「あれこそ沖の鷗候よ。」

シテ 「うたてやな、浦にては千鳥ともいへ鷗ともいへ、などこの隅田川にて、白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ。」

ワキ げに〜誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥と答へ申さて。

シテ 沖の鷗と夕波の、

ワキ 昔に返る業平も、

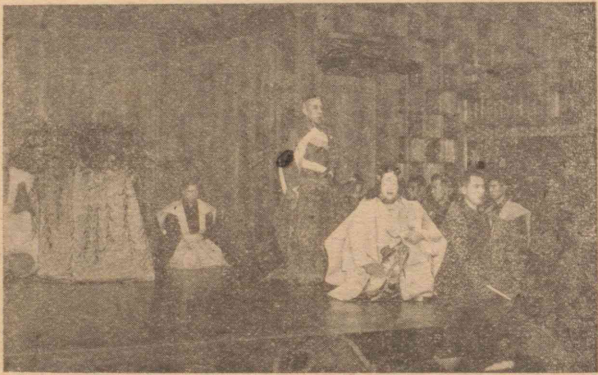
シテ ありやなしやと言問ひしも、

ワキ 都の人を思ひ妻。

シテ わらはも東に思ひ子の、行方を問ふは同じ心の、

ワキ 妻を思ひ、

舟競ふ
堀江の川のみなぎは
に來居つゝ鳴
くは都鳥かも
(大伴家持一萬
葉集)
堀江の川
大阪市内を貫
流



(一) 面 臺 舞 能

シテ 子を尋ぬるも、

ワキ 思は同じ、

シテ 戀路なれば、

地上歌 我も亦、いざ言問はん都鳥、い

ざ言問はん都鳥、わが思ひ子は東

路に、ありやなしやと問へども問

へども答へぬは、うたて都鳥、鄙の

鳥とやいひてまし。げにや舟競

ふ、堀江の川の水際に、來居つゝ鳴

くは都鳥、それは難波江、これはま

た、隅田川の東まで、思へば限りなく遠くも來ぬるものかな。

さりとはは渡守、舟こぞりて狭くとも、乗せさせ給へ渡守、さりとはは乗せてたび給へ。

ワキ 「かゝる優しき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。この渡りは大事の渡りにて候。構へて静かに召され候へ。

ツワキ 「なうあの向かひの柳の下に、人の多く集りて候は何事にて候ぞ。

ワキ 「さん候。あれは大念佛にて候。それにつきて哀なる物語の候。この舟の向かひへ著き候はん程に、語つて聞かせ申さうずるにて候。

語 さて去年三月十五日しかも今日に相當りて候。商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買取つて

奥
陸奥國

奥へ下り候が、この幼き者未だ習はぬ旅の疲にや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、この川岸にひれふし候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、この幼き者をばそのまま路次に捨てて、商人は奥へ下つて候。さる間、この邊の人、この幼き者の姿を見候に、由ありげに見え候程に、様々にいたはりて候へども、前世の事にもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、我は都北白河に、吉田の何某と申しし人のたゞ一人子にて候が、父には後れ、母ばかりに添ひまゐらせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうに成行き候。都の人の足手影も懐かしう候へば、この道のほとりにつきこめて、しるしに柳を植ゑて給はれ」とお

となしやかに申し、念佛四五遍唱へ、遂に事終つて候。なんぼう哀なる物語にて候ぞ。見申せば、船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて、御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が著いて候。疾うく御上り候へ。

ヅレキ 「いかさま今日はこの處に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうずるにて候。

ワキ 「如何にこれなる狂女、何とて船よりは下りぬぞ、急いであがり候へ。あら優しや、今の物語を聞き候ひて、落涙し候よ。なう、急いで舟よりあがり候へ。

シテ 「なう舟人、今の物語はいつの事にて候ぞ。

ワキ 「去年三月、今日の事にて候。

シテ 「さてその兒の年は。

ワキ 「十二歳。

シテ 「主の名は。

ワキ 「梅若丸。

シテ 「父の名字は。

ワキ 「吉田の何某。

シテ 「さてその後は親とても尋ねず、

ワキ 「親類とても尋ね來ず、

シテ 「まして母とても尋ねぬよなう。

ワキ 「思ひも寄らぬ事。

シテ 「なう、親類とても親とても尋ねぬこそ理なれ。その幼

き者こそ、この物狂が尋ぬる子にては候へとよ。なう、これは夢かや、あら、あさましや候。

ワキ 「言語道斷の事にて候ものかな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞや。あら痛はしや候。かの人の墓所を見せ申し候べし。こなたへ御出で候へ。」

道のほとりの土

古墓何代ノ人
知ラズ姓ト名
トヲ 化シテ
路傍ノ土トナ
リ年々春草ヲ
生ズ(白樂天)

シテ 今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今はこの世に亡き跡の、しるしばかりを見る事よ。さても無慚や死の縁とて、生所を去つて東のはての、道のほとりの土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそあるらめや。

地謡 さりとては人々、この土を返して今一度、この世の姿を

母に見せさせ給へや。

上歌 残りても、甲斐あるべきは空しくて、甲斐あるべきは空しくて、あるは甲斐なき帚木の、見えつ隠れつ面影の、定めなき世の習、人間憂の花盛り、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲覆へり。げに目の前の憂き世かな、げに目の前の憂き世かな。

ワキ 「今は何と御歎き候ひても甲斐なき事、たゞ念佛を御申し候ひて、後世を御弔ひ候へ。」

謡 既に月出て川風も、はや更け過ぐる夜念佛の、時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らし勸むれば、

帚木の

その原や伏屋
におふる帚木
のありとはみ
えてあはぬ君
かな
(新古今集)

謡シテ 母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、たゞひれ
ふして泣き居たり。

ワキ 「うたてやな、餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はん
をこそ、亡者も喜び給ふべけれど、

謡シテ 鉦鼓を母にまゐらすれば、

謡シテ わが子のためと聞けばげに、この身も梟鐘を取上げて、

謡シテ 歎をとゞめ聲澄むや、

謡シテ 月の夜念佛もろともに、

ワキ 「心は西へと一筋に、

ワキテ、 南無や西方極樂世界、三十六萬億同號同名阿彌陀佛、

地謡 南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、

謡シテ 隅田河原の波風も、聲立て添へて、

地謡

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

謡シテ 名にし負はば都鳥も音を添

へて、

能子方 南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛

舞臺 南無阿彌陀佛。

面シテ 「なうく、今の念佛のうち、

正しく我が子の聲の聞え候。こ

の塚の内にてありげに候よ。

(二) ワキ 「我等もさやうに聞きて候。

所詮こなたの念佛をばとゞめ候

べし。母御一人御申し候へ。

謡シテ 今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛、



今一聲こそ
ゆきやらで山
路くらしつ時
鳥いま一聲の
聞かまほしき
に (拾遺集)

子方 南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、

地謡 聲のうちより幻に見えければ、

子方 誦シテ あれはわが子か。

子方 母にてましますかと。

地謡 互に手に手を取りかはせば、また消えくと成行けば、

いよ／＼思はます鏡、面影も幻も、見えつ隠れつする程に、東雲の空もほの／＼と明けゆけば跡絶えて、わが子と見えしは塚の上の草、茫々としてたゞしるしばかりの浅茅が原となるこそ哀なりけれ、なるこそ哀なりけれ。
(觀世流謡本)

佐藤春夫

詩人 小説家
明治二十五年
生

二〇 敵前渡河

佐藤 春 夫

生か 簇る敵を前にして

江を渡るつはものら

它山クリーク乗出でて

まだきの朝を進み行く

不敵の業を知らざるか

今江上は闐として

たゞ決々の濁り水

決死の兵を浮かべたる

決死の兵を浮かべたる

雙眼鏡をのぞけども
朝霧つゝみかはたれの
闇にとざされ行く舟の
すがた見えぬぞたのもしき

半壁山の砲臺に

敵が狙ひも惱むらむ

或は勝利を夢みつゝ

あしたの眠覺めざるか

眼鏡の奥に行きかはす

ものすさまじき火花あり

敵も味方も亂れ打つ
機銃の跟あきと知られたる
折しも江のたゞ中ゆ
くろ煙涌く水柱
敵の重砲なま彈落ちぬ
味方の行手遮ると
固唾を呑まんひまもなく
援護の艦の檣頭に
光またゝき信號す
先頭すでに上陸と

小暗き山を背景に
たへにいみじくきらめくは
愛する者がまたゝきか
無言のうちに意味ふかし

胸とゞろかし待つ程に
まだ半時も過ぎざるに
再び光またゝきぬ
上陸すべて完しと

夜は明放れ朝日さす
敵が臺場のうへ高く

日の大御旗はためくを
眼鏡のなかに見たりしか！
あゝつはものがもろくの
苦戦のさまはおろかなる
わが眼鏡にはうつらねば
事もなげにも見えしかど
この日味方はすぐれたる
十あまり三たり失ひぬ
光たへなる信號は
勇士が魂やかゝやきし



銃 後

相馬御風

名は昌治
詩人 評論家
明治十六年生

二 祈から信へ

相馬 御風

死して護國の英靈となつた人と、生きて大君の御楯となつて奮闘しつゝある人との別はあつても、出征勇士を父として持つてゐる子供たちの心は、いづれも絶えず父の身につき纏うて離れない。

清き彼等の心は、たゞ祈の一念に凝固まつてゐる。

彼等は神に祈る。佛に祈る。天に祈る。地に祈る。太陽に祈る。月に祈る。山に祈る。海に祈る。雲に祈る。土に祈る。そして草に祈る。

そして、彼等の祈は、究極するところ、たゞ「勝て！」

の一語に盡きる。

最愛の父を護國の英靈として仰いでゐる子等も、最愛の父を戦地の勇士として懐かしんでゐる子等も、彼等の祈の心はきはまるところ、

「皇軍よ勝て！」
の一念に存する。

皇軍の勝利と、皇國の勝利によつてのみ、英靈は安らひを得、勇士の望は充たされるのである。

勝利は、併し、狹義の戦勝のみを意味するのではない。思想的にも、経済的にも、外交的にも、政治的にも、文化的にも、あらゆる點に於て、われらは勝たなければならぬ。

内に籠つて信となる力——この最後最上の力の把握にまで進まなければ、眞に勝つとはいへない。

前途は遠い。われら日本國民の總べてが眞にわれ勝つの信を固むるところまで行つてこそ、始めて眞の勝利者の世界が展開する。

われらは今その第一歩を踏出したに過ぎない。

勝て！の祈は、つひに聖熱を帯び來らざるを得ない。

同胞の一滴の血たりとも、勝利の祭壇に捧げられるのでなくはならない。

父を失つた子は人知れず泣いてゐる。父を御國に捧げて戦地へ送つてゐる子は、人知れず淋しがつてゐる。そして日

夜小さき胸に父の身の上を案じ煩つてゐる。

併し、さうした悲しみの中から、又淋しさや心配の中から涌上る勇氣と力こそ最も貴く、最も輝かしく、最も強いものである。

悲哀の底をぶち抜いた強さ！ 弱さに徹した強さ！ それこそ眞の無敵であらねばならぬ。清き涙に照輝く天つ日の光を見よ。

悲しみから祈へ！ 祈から信へ！ 銃後無敵の心の固めはそこにきはまらねばならぬ。

大御稜威絶対の信は、同時に大御民みづからの不動信と合致せねばならぬ。

絶対不動の信の一步に究極する時、總べての人間は神である。大君の御爲、御國の爲に一切を捧げ盡くして戦場の華と散つた英靈が護國の神として仰がるゝはいふまでもない。一切を大御稜威絶対信に委ね、御召に應じて立上つた時、すでにその人は神の境界に入つたのである。

聖戦の大精神、大光明に攝取せられた瞬間、現世人としてのあらゆる穢は淨められ、總べての罪障は消滅せられて、人々は皆神の境界に入り得る。そのありがたさと貴さを、人々は眞にどん底から自覺しなくてはならぬのである。そしてそれをどん底から自覺してこそ、人々は「つはもの」としての自己の重んずべき存在意義をも眞に自覺することが出来るのである。

ある。

聖光に攝取せられ、御稜威に一切おまかせ申し上げたものの安らかさ、貴さよ。それこそ神の境界でなくて何であらう。それこそ涅槃の境界でなくて何であらう。

父をみいくさに失うた子等よ。肉身の父を哀惜し、悲しむ代りに、神となりたまうた父を拜みまつれ。

父をみいくさ人として送り出した子等よ。肉身の父を愛惜するを止めて、神として立ちたまうた父に合掌せよ。

愛惜から拜みへ！ 拜みから祈へ！ そして祈から御大稜威絶対信へ！

われらは切にそれをねがふ。

(土に祈る)

平家物語

十二卷(流布本)

鎌倉初期に成つた軍記物語
作者未詳

太政入道

平清盛

貞能

平貞能

清盛の腹心の臣

平右馬助

清盛の叔父忠正

新院

崇徳上皇

一宮

重仁親王

故刑部卿

清盛の父忠盛

三三 小松内府

(平家物語)

太政入道は斯様に人々あまた縛め置いてもなほ心ゆかずや思はれけん、すてに赤地の錦の直垂に黒絲絨の腹巻の白金物打つたる胸板せめて、先年安藝守たりし時、神拜の序に靈夢を蒙つて嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりし銀の蛭巻したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊へぞ出でられける。その氣色大方ゆゝしうぞ見えし。貞能を召す。筑後守貞能は木蘭地の直垂に、緋絨の鎧著て、御前に畏つてぞ候ひける。入道宣ひけるは、貞能、このこといかゞ思ふ。保元に平右馬助を始として、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一宮の御事は、故刑部卿殿の養君にてま

故院

鳥羽法皇

平治元年

一八一九年

信頼

藤原信頼

院

後白河上皇

内

二條天皇

經宗

藤原經宗

惟方

藤原惟方

成親

藤原成親

西光

藤原師光

鳥羽

現京都市の内

しまししかば、旁見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて先を驅けたりき。これ一つの奉公なり。次に、平治元年十二月、信頼・義朝が院内を取り奉り、大内に立籠つて、天下暗闇となつたりしに、入道身を捨てて兇徒を追落し、經宗・惟方を召縛めしに至るまで、すてに君の御爲に、命を失はんとすること度々に及ぶ。たとひ人何と申すとも、七代まではこの一門をば、いかでか捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづら者、西光といふ下賤の不當人めが申すことにつかせ給ひて、この一門滅ぼすべき由、法皇の御結構こそ遺恨の次第なれ。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつては、いかに悔ゆとも益あるまじ。世を鎮めん程、法皇を鳥羽の北殿へ移し奉るか、

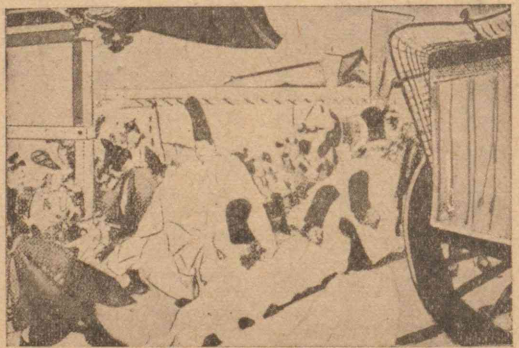
主馬判官盛國
 平維盛の弟季
 衡の二男
 小松殿
 京都八條の北
 堀川の西にあ
 った平重盛の
 邸
 法住寺殿
 鳥羽・後白河
 兩法皇の離宮
 鎮西
 九州
 禪門
 清盛
 西八條殿
 清盛の邸

然らずば、これへまれ、御幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、北面の輩、矢をも一つ射んずらん。侍どもにその用意せよと觸るべし。大方は、入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍置かせよ。著背長取出せとぞ宣ひける。

主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳参つて、世は、すでにかう候と申しければ、大臣聞きもあへず、あは、はや、成親卿が頭を刎ねられたるなと宣へば、さは候はねども、入道殿著背長召され候。侍どもも皆打立つて、たゞ今、法住寺殿へ寄せんと出立ち候。『法皇をば鳥羽殿へおしこめ移し参らせう』と候が、内々は鎮西の方へ流し参らせうと、議せられ候と申しければ、大臣、いかてかさることあるべきとは思へども、今朝の禪門の氣色、さる物狂はしきこともあるらんとて、車を飛ばして、西八條殿へぞお

はしたる。

門前にて車より下り、門の内へさし入つて見給へば、入道腹巻を著給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各色々の直垂に思ひくゝの鎧著て、中門の廊に二行に著座せられたり。その外、諸國の受領衛府諸司などは、縁に居こぼれ、庭にもひしと並み居たり。旗竿どもなども引きそばめく、馬の腹帯をかため、兜の緒をしめ、たゞ今みな打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子直衣に、大紋の指貫のそばとつて、さやめき入り給へば、殊の外にぞ見えられける。



入參殿條八西の盛重

入道伏目になつて、あはれ例の内府が、世をへうする様に振舞ふ、大いに諫めばやとぞ思はれけれども、さすが子ながらも内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を著て向かはんこと、おもはゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引立てて、素絹の衣を腹巻の上にあわて著に著給ひけるが、胸板の金物の少しはづれて見えけるを隠さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道宣ひ出す旨もなし、大臣申し出さるゝこともなし。やゝあつて、入道の宣ひけるは、成親卿が謀反はこの數にもあらず。一向法皇の御結構にてありけるぞや。世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し奉るか、然らざればこれへまれ、

天兒屋根命
藤原氏の祖

御幸をなし參らせんと思ふはいかに」と宣へば、大臣聞きもあへず、はらくとぞ泣かれける。入道、いかに」とあきれ給ふ。大臣涙を抑へて申されけるは、この仰せ承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。また御有様、更にうつゝとも覺え候はず。さすが、我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末朝の政をつかさどり給ひしよりこのかた、太政大臣に至る人の、甲冑を鎧ふこと、禮儀を背くにあらざや。就中御出家の御身なり。法衣をぬぎ捨て、忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帶しまし、さんこと、内には破戒無慚の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。旁、恐ある申しごとにて候へども、心の底

普天の下

溥天ノ下王土

ニ非ザルナク

率土ノ濱王臣

ニ非ザルナン

(詩經)

潁川の水に

許由

首陽山に

伯夷・叔齊

に旨趣を残すべきにあらず。

まづ世に四恩候。天地の恩國王の恩父母の恩衆生の恩これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらずといふことなし。されば彼の潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命背き難き禮儀をば存知すところ承れ。何ぞ況や先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身をもて、蓮府・槐門の位に至る。加之國郡半ばは一門の所領となり、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これらの莫大の御恩を忘れて、みだりがはしく法皇を傾けまつらせ給はんこと、天照大神・正八幡宮の神慮にも背き候ひなんぞ。日本はこれ神國なり。神は非禮を受け給はず。然れば君の思し召立つと

ころ、道理半ばなきにあらず。中にもこの一門は、朝敵を平げて、四海の激浪を鎮めしことは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。然れども、當家の運命盡きぬによつて、謀反すてに顯れぬ。その上、仰せ合はせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれん上は、退いてことの由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈々奉公の忠勤を盡くし、民の爲には益々撫育の愛憐を致させ給はば、神明・佛陀感應あらば、君も思し召しなほすこと、などか候はざるべき。

こは君の御理にて候へば、かなはざらんまでも院の御所法住寺殿を守護し參らせ候べし。その故は、重盛敍爵より今大

千顆萬顆の玉
一入再入の紅
日ニ瑩キ風ニ
瑩ク 高世千
顆萬顆ノ玉
枝ヲ染メ浪ヲ
染ム 表裏一
入再入ノ紅
(和漢朗詠集)

迷廬八萬の巔
須彌山

進退これ谷れ
り
(詩經)

臣の大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。その恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも越え、その恩の深きことを案ずれば、一入再入の紅にも過ぎたらん。然れば院中に参り籠り候べし。その儀にて候はば、重盛が身に代り、命に代らんと契りたる侍ども少々候らん。これ等を召具して、院の御所法住寺殿を守護し参らせ候はば、さすが以ての外の御大事にてこそ候はんずらめ。悲しきかな、君の御爲に忠を致さんとすれば、迷廬八萬の巔よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を遁れんと思へば、君の御爲にはすでに不忠の逆臣となりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。院中をも守護し参らすべからず。

院参の御供をも仕るべからず。

富貴といひ、榮華といひ、朝恩といひ、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木はその根必ず傷むと見え候。心細うこそ覚え候へ。いつまでか命生きて、亂れん世も見候べき。たゞ末代に生を受けて、かゝる憂目にあひ候重盛が果報の程こそ拙う候へ。たゞ今も侍一人に仰せつけて、御坪の内に引出されて、重盛が頭の刎ねられんことは、いと易い程の御事でこそ候へ。これを各聞き給へ」とて、直衣の袖も絞るばかり、涙を流しかき口説かれければ、一門の人々心あるも心なきも、皆鎧の袖をぞぬらされける。

太政入道も、頼み切つたる内府はかやうに宣ふ、力もなげに

て、いや／＼、それまでは思ひもよりさうず。悪黨どもが申すことにつかせ給ひて、ひがごとなどや出て來んずらんと思ふばかりでこそ候へ」と宣へば、たとひ如何なるひがごと出て來候とも、君をば何とし參らせ給ふべき」とて、つい立つて中門に出でて、侍どもに仰せられけるは、たゞ今重盛が申しつることどもをば、汝等承らずや。今朝よりこれに候ひて、斯様のことも申し鎮めんと存じつれども、餘りにひた騒ぎに見えつる間、歸りつるなり。院參の御供に於ては、重盛が頭の召されんを見て仕れ。さらば、入參れ」とて、小松殿へぞ歸られける。

二二 人臣の道

北 畠 親 房

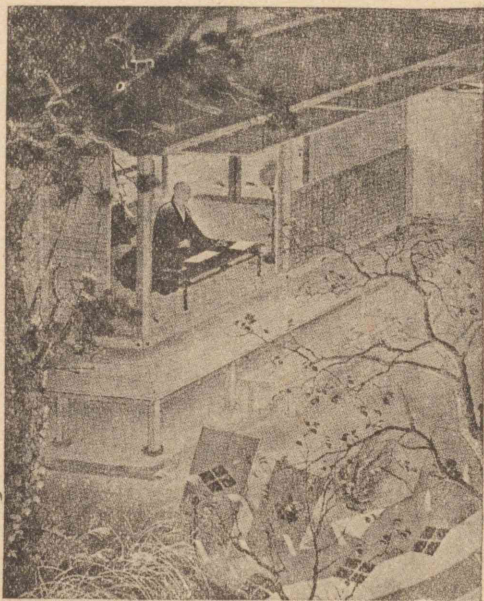
前車の轍
前車ノ覆ルハ
後車ノ誠ナリ
(漢書)

鳥羽院
鳥羽天皇
第七十四代

凡そ王土にはらまれて、忠をいたし命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。しかれども、後の人をはげまし、其の跡をあはれみて賞せらるゝは、君の御政なり。下として競ひ諍ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功なくして過分の望をいたすこと、みづからあやぶむるはしなれど、前車の轍を見ることはまことに有りがたき習なりけんかし。

中古までは、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強に成りぬれば、必ずおごる心あり。果して身を亡し家を失ふためしあれば、戒めらるゝも理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の

武士の源平の家に属することを止むべしといふ制符度々ありき。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は宣旨



親房神皇正統記を著す

を賜はりて諸國の兵を召し具しけるに、近代と成りて、やがて肩を入るゝ族多くなりしに依りて、此の制符は下されき。果して今までの亂世の基なれば、いふかひなきこ

とに成りにけり。

此の比のことわざには、一たび軍にかけあひ、或は家子郎従

節に死ぬる類あれば、我が功におきては日本國を賜へ、若しは半國を賜ひてもたるべからず、など申すめる。まことにさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれよりみだるゝはしともなり、又朝威のかるゝしさも推しはからるゝものなり。

「言語は君子の樞機なり」といへり。あからさまにも君をな

いがしろにし、人におごることはあるべからぬことにこそ。堅氷は霜を履むよりいたる習なれば、亂臣賊子といふものは、其の始、心ことばをつゝしまざるより出で来るなり。世の中のおとろふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色のおらたまるにもあらず。人の心の悪しくなり行くを末世とはいへるにや。

昔、許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、頽

言語は

言行ハ君子ノ

樞機ニシテ

樞機ノ發ハ榮

辱ノ主ナリ

(易經)

堅氷

霜ヲ履ンデ堅

氷至ル(易經)

帝堯

支那太古の帝

王

穎川
現支那淮水の支流
 巢父
支那堯代の高士

川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、此の水をだにきたな
 がりてわたらず。其の人の五臟六腑のかはれるにはあらず。
 よく思ひならはせる故にこそあらめ。

なほ行末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。大方おの
 れ一身は恩にほこるとも、萬人の恨を残すべきことをばなど
 か顧みざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地を
 もちて、限りなき人にわかたせ給はんことは、推してもはかり
 奉るべし。若し、一國づつ望まば、六十六人にてふさがりなん。
 一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十
 四人はよろこぶとも、千萬の人はよろこばじ。況や、日本の半
 ばを心ざし、皆ながら望まば、帝王はいづくをしらせ給ふべき
 にか。かゝる心の萌して、ことばにも出で、面にはづる色のな

將門
平將門 一六〇〇年死
 漢の高祖
劉邦 四六頁参照
 蕭何
高祖の宰相
 張良
高祖の謀臣
 韓信
高祖の將軍
はかりごとを 籌策ヲ帷幄ノ中ニ運ラシテ勝ヲ千里ノ外ニ決スルハ吾子房ニ如カズ
(史記)
 留
現支那江蘇省沛縣

きを、謀反の始といふべきなり。昔の將門は比叡山に登りて
 大内を遠見して、謀反を思ひ企てけるも、かゝる類にや侍りけ
 ん。昔は人の正しくておのづから將門に見もこり、聞きも侍
 りけん。今は人々の心かくのみ成りにたれば、此の世はよく
 おとろへたるにや。

漢の高祖の天下をとりしは蕭何・張良・韓信が力なり。これ
 を三傑といふ。中にも張良は高祖の師として、はかりごとを
 帷帳の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するはこの
 人なり。とのたまひしかど、張良はおごることなくして、留とい
 ひてすこしきなる所を望みて封ぜられにけり。あらゆる功
 臣多く亡びしかど、張良は身を全くしたりき。

近き代のことぞかし。頼朝の時までも、文治の比にや、奥の

文治の比

後鳥羽天皇の

御代

奥

一二九頁参照

平重忠

莊司二郎

源頼朝の臣

一八六五年歿

五十四郡

奥羽五十四郡

長岡

現宮城縣遠

田・志田・栗原

三郡の内

泰衡を追討せしに、みづから向かふことありしに、平重忠が先陣にて、其の功すぐれたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、きはめたる小さき所を望みて、賜はりけるとぞ。これは人にひろく賞をも行はしめんがためによ。かしこかりけるをのこにこそ。

又直實といひける者に一所を興へ給ふ下文に「日本第一の剛の者なり」と書いて給ひてけり。一とせ彼の下文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美のことばの甚だしきに、興へたる所のすくなさ、まことに名を重くして利を軽くしける、いみじきことと口々に褒めあへりけり。いかに心得て褒めけんといとをか。これまでの心こそなからめ、事に觸れて君をおとし奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東

中一とせ

建武元年

一九九四年

國の風儀もかはりはてぬ。公家の古き姿もなし。いかになりぬる世にかと歎き侍る輩もありときこえしかど、中一とせばかりは、まことに一統のしるしおぼえて、天の下こそり集りて、都の中はえくしくこそ侍りけれ。

(神皇正統記)

改訂 新女子國文 四年制 卷六終

昭和昭和昭和昭和
 和和和和和和
 十十十十十十
 六六二二二二
 年年年年年年
 八十七十六六
 月月月月月月
 三二十二十
 十一十六十七
 日日日日日日

訂訂訂訂初
 正正正正版
 五五五五版
 版版版版發
 發行發行發行發行



著者

久松潜一

發行者

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
 中等學校教科書株式會社

印刷者

東京市京橋區銀座西二丁目三番地
 三協印刷株式會社
 代表者 山本慶治
 代表者 高橋郁

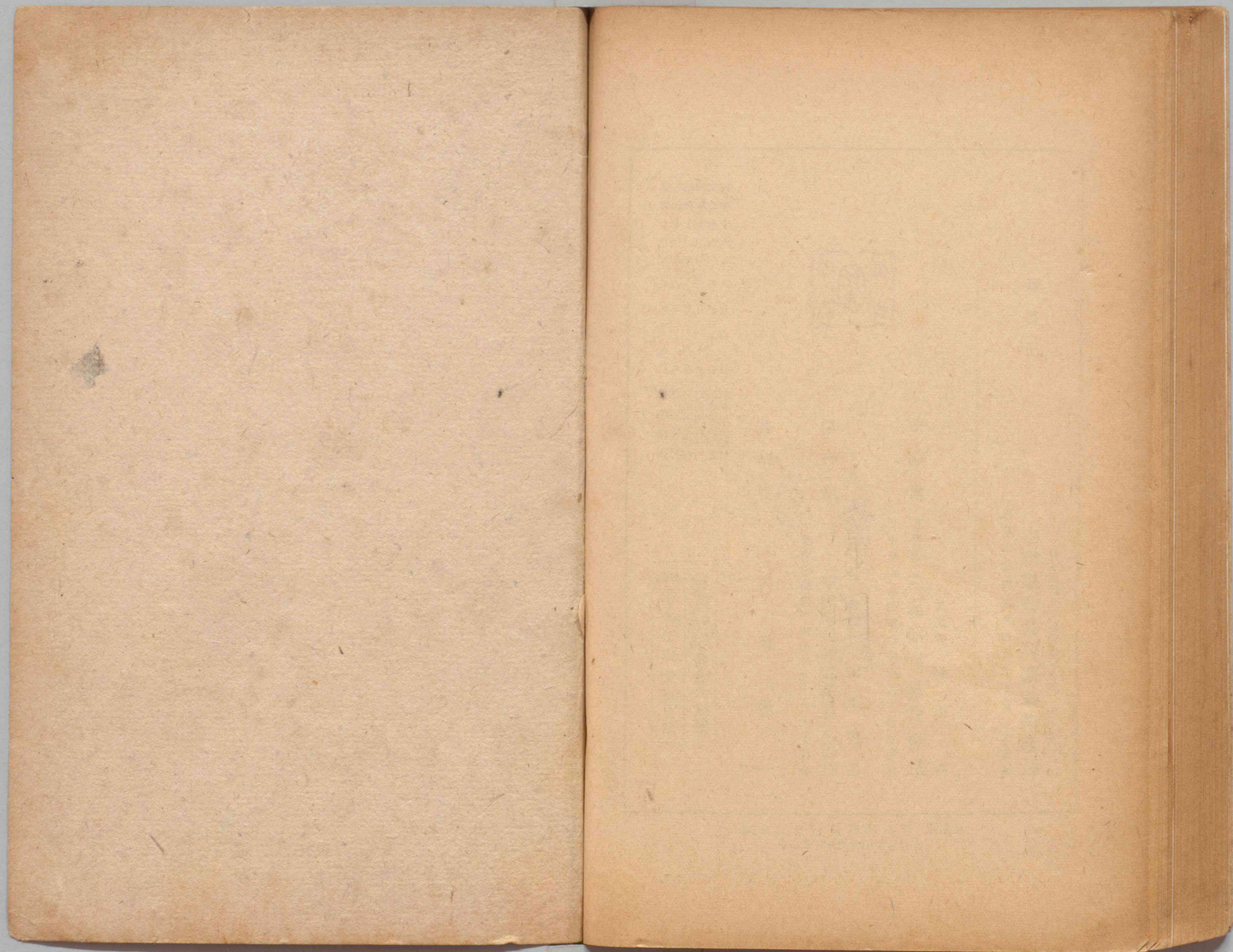
發行所

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地
 中等學校教科書株式會社
 日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

訂改
 新女子國文四年制
 定價 一・三・四
 五・六・七・八 各金六拾錢

(略名) 至文久松女國

配給元 日本出版配給株式會社
 東京市神田區淡路町2ノ9



三年
松組
巻 8

広島大学図書

2000301748

